

# 『左傳』と春秋史

吉 本 道 雅

## 序言

『左傳』\*1は春秋史研究の最も基礎的な文献だが、その記述のありかたは決して一様ではない。年次ごとの字數や月日の分布など、時期によってかなり顕著な増減が認められる。それら定量的分析に堪えるいくつかの材料のうち、本稿は『左傳』における月日の記述を素材に、『左傳』の性格の一端を解明するものである。

『左傳』に限らず、先秦文献の定量的研究は必ずしも多くない\*2。『左傳』については、まず衛聚賢 1928 がある。衛氏は、『左傳』の 5 年ごとの字數を統計した結果、『左傳』の記述する 255 年を、①隱公元年 722BC～僖公二十二年 638BC の 85 年、②僖公二十三年 637BC～襄公二十年 553BC の 85 年、③襄公二十一年 552BC～昭公二十九年 513BC の 40 年、④昭公三十年 512BC～哀公二十七年 468BC の 45 年に分かち、①「低」・②「平」・③「高」・④「平」、すなわち①→②→③には字數が増加し、ついで③→④において減少に轉ずることを確認した。衛氏は、この増減の原因を資料の有無に歸する。すなわち、①→②→③については、時代が降るほど資料が豊富になることを反映して字數が増加するが、③→④については、最も降った時代については資料がなお傳播していないため、字數が減少するとする。後述するように、この説明は必ずしも有効ではないが、定量的分析に基づく時期区分の可能性を提示した點は今なお有効な見解である。

同じく『左傳』の字數に注目した研究としては、近年の野間 2010 が挙げられる。野

---

\*1 『左傳』の研究史については野間 2010 参照。さらに「浙大簡」をも含む直近の研究情況については別稿を準備中である。

\*2 『春秋』については、山田 2004、『國語』については吉本 2014 がある。

間は、春秋時代を①前期：隱公元年 722BC～僖公二十年 640BC の 83 年、②中期：僖公二十一年 639BC～襄公二十年 553BC の 87 年、③後期：襄公二十一年 552BC～哀公二十七年 468BC の 85 年の三期に分ち、『左傳』各年の字數を統計した上で、2000 字以上の年次において多く文字を費やして記述された事件を摘出し、それらを手がかりに、『左傳』の記述の重點が、前期は齊桓公・晉文公の霸業、中期は戦争、後期は賢人の言動にあるとする。『左傳』の特徴を簡潔に提示し得たものとする。しかし、その一方で、字數の多い年次のさらに字數の多い事件を選択するという作業の進め方では、當然のことながら、取りこぼされる材料も少なくない。

定量的分析は、関連する材料を漏れなく扱うことで、その利點を最大限に活かしようものとする。そうした見地に立ち、本稿では、『左傳』における日月の記述を素材に、『左傳』の記述のありかたの段階的な變化、すなわち『左傳』それ自體による春秋史の時代區分を確認し、そのような時代區分を前提に『左傳』の關心の所在を展望するものである。

## 第一章 『春秋』『左傳』における年時月日

『春秋』および『左傳』は記事を時系列順に記述する形式を採り、いわゆる編年體の最初の書物である。各章の冒頭に、年時月日が記されることが多い。個別具體的な分析をはじめの前に、『春秋』および『左傳』における年時月日の記述（以下、紀年・紀時・紀月・紀日と稱する）のありかたを確認しておく。

『春秋』『左傳』の各年次の記述は、複数の章に分割される。『春秋』の年時月日は基本的に章の冒頭に置かれる。本稿では、便宜的に小倉芳彦 1988-89 の分章を用いることにする\*3。經には傳をもつ章とまたない章があり、傳には經に對應する章と對應しない章とがある。それぞれ有傳之經・無傳之經、有經之傳・無經之傳と稱する。小倉に従い、經の章およびそれに對應する有傳之傳の章には 1・2・3…、無經之傳の章には A・B・C…を用いることとする。以下、經傳の各章を「隱元經 1」のように略記する。

\*3 もっとも小倉は傳の分章については、たとえば隱十 2・3 の如く、いくつかの章を一つにまとめている。本稿では小倉がまとめた部分をあらためて分解する。

まずは經における年時月日である。たとえば、隱二～隱四經は次の如くである（無傳之經には番號の前に\*を附しておく）。

- 1 二年春、公會戎于潛。
- 2 夏五月、莒人入向。
- 3 無駭帥師入極。
- 4 秋八月庚辰、公及戎盟于唐。
- 5 九月、紀裂繻來逆女。
- \* 6 冬十月、伯姬歸于紀。
- 7 紀子帛・莒子盟于密。
- \* 8 十有二月乙卯、夫人子氏薨。
- 9 鄭人伐衛。
- 1 三年春王二月己巳、日有食之。
- 2 三月庚戌、天王崩。
- 3 夏四月辛卯、君氏卒。
- 4 秋、武氏子來求賻。
- 5 八月庚辰、宋公和卒。
- 6 冬十有二月、齊侯鄭伯盟于石門。
- \* 7 癸未、葬宋穆公。
- \* 1 四年春王二月、莒人伐杞、取牟婁。
- 2 戊申、衛州吁弑其君完。
- 3 夏、公及宋公遇于清。
- 4 宋公・陳侯・蔡人・衛人伐鄭。
- 5 秋、翬帥師會宋公・陳侯・蔡人・衛人伐鄭。
- 6 九月、衛人殺州吁于濮。
- 7 冬十有二月、衛人立晉。

隱三 1 は「三年春王二月己巳」と、年時月日が全て揃った最初の章である。各年次の最初の章の冒頭には、「三年」の如く、魯侯の紀年が置かれる。次の紀年の直前の章までがこの紀年に屬する。

紀年の次には、「春」の如く、春夏秋冬の紀時が置かれる\*4。次の紀時の直前の章までがこの紀時に属する。

紀時の次が正月～十有二月・閏月の紀月である。正月～三月は春、四月～六月は夏、七月～九月は秋、十月～十二月は冬に属する。月の序数につき經は「十有一」「十有二」を用いるが、傳は「十一」「十二」を用いる\*5。春の最初の章が紀月をもつ場合は、「王二月」の如く序数の前に「王」字が置かれる\*6。また時に属する具体的な事件が無い場合、經は、「春王正月」「夏四月」「秋七月」「冬十月」を置く\*7。

紀月の次に「己巳」のように干支を用いた紀日が置かれる。

經文各章は當然のことながら、年時月日の全てをもつわけではない。紀年はその年次の最初の章だけがもつ。年時月日のほか、年時月（隱四1）・年時（隱二1）がある。時から始まる場合も、時月日（隱二4・隱三3）・時月（隱二2・6・隱三6・隱四7）・

\*4 紀月の前に紀時を置くことは、出土文字資料では、秦孝公十八年 344BC の紀年をもつ商鞅量「十八年、…冬十二月乙酉」（中國社會科學院考古研究所 1984-94：16.10372）が現時點で確認される最古の事例である。このことを根據に、洪業 1937 は經の紀時を前漢末年に補われたものとするが、俄には従いがたい。まず何より、現時點で利用可能な春秋戰國期の出土文字資料は、このような議論を傍證するにはあまりにも乏しい。むしろ、「春秋」の名稱こそが紀時を用いたことに由来するものと考ええる。『春秋』の存在は、『子思子』逸篇とされる『禮記』坊記「春秋不稱楚越之王喪」・「未沒喪不稱君、示民不爭也。故魯春秋記管喪曰、殺其君之子奚齊及其君卓」・「子云、取妻不取同姓、以厚別也。故買妾不知其姓、則卜之、以此坊民。魯春秋猶去夫人之姓曰呉、其死曰孟子卒」に認められる。『子思子』の成書は前5、前4世紀の交に推定され、遅くともこの頃には現行本に似た『春秋』が存在し、儒家に經典化されていたことになる。吉本 1995 參照。

\*5 「十有×月」がより古い形式であることはいうまでもない。「十×月」は、出土文字資料では、温縣載書（河南省文物考古研究所 1983：T1 坎 1:2182）「十五年十二月乙未朔辛酉」に初見する。一方で、侯馬載書（山西省文物考古委員會 1976）には「十又一月甲寅朔乙丑」と見える。これらがともに范・中行の亂（497-490BC）に關わるものであったとすれば、「十一月」「十二月」の記法はこの時期までには出現し、より古い形式の「十有一月」「十有二月」と混用されていたことになる。吉本 1985a・1985b 參照。

\*6 隱元經1「元年春王正月」につき、楊伯峻 1990 は「相傳周王朝于每年末頒明年曆書於諸侯、諸侯奉而行之」と説明する。經の「春王×月」は周曆を意味するものと解することが最も無理が無いが、經の原資料となった魯の史記にすでに周曆が用いられていたのか、經の編纂の段階で周曆を標榜して「王」字が附せられたのかは確言できない。後述の如く、傳の王子朝の亂の記述に見える時月日は、周年代記に由来すると思われるが、經の曆とは合わない。「王」が起源的に周王朝の曆頒布に由来するものであったとしても、春秋期の諸侯國はすでに自ら曆を作成していたものと思われる。

\*7 『春秋經』隱六「秋七月」注「雖無事而書首月、具四時以成歲、他皆放此」。

時（隱四三・五）があり、紀月から始まる場合も、月日（隱三二・五）・月（隱二五・隱四六）がある。

さらに紀日のみの場合（隱三七・隱四二）や紀日さえもたない場合（隱二三・七・九・隱四四）がある。紀日のみの日は、形式的にはその直前の月に属するが、たとえば隱四二「戊申」は1「二月」に属さず「三月」に属する\*8。經が編纂された段階で「三月」を置き忘れているのである。

紀日さえもたない場合、事情はより複雑である。隱四四の直前の3が「夏」と時のみなので、4が「夏」に属することは問題ない。また隱二九の如く直前の8が「十有二月乙卯」である場合は十二月に属し、乙卯より後であると扱ってさしあたり問題ない。ところが、隱二三は直前の2が「夏五月」、隱二七は直前の6が「冬十月」なので、それぞれ五月・十月に属するものとみなされ、また傳においてそうした判断で紀月が補われる事例も少なくないが、その一方で、傳において独自の月日が補われる事例もあり、實のところ、これら紀日さえもたない章は、その直前の章より時系列的に後に属するという以上のことはいえそうもない。

次に傳について考えてみよう。まず隱二の經傳を対照すると次の如くである。

1 二年春、公會戎于潛。	1 『二年春、公會戎于潛』、修惠公之好也。戎請盟、公辭。
2 夏五月、莒人入向。	2 莒子娶于向、向姜不安莒而歸。『夏、莒人入向』、以姜氏還。
3 無駭帥師入極。	3 『司空無駭入極』、費彥父勝之。
4 秋八月庚辰、公及戎盟于唐。	4 戎請盟。『秋、盟于唐』、復修戎好也。
5 九月、紀裂繻來逆女。	5 『九月、紀裂繻來逆女』、卿爲君逆也。
* 6 冬、十月、伯姬歸于紀。	
7 紀子帛莒子、盟于密。	7 冬、『紀子帛・莒子盟于密』、魯故也。
* 8 十有二月乙卯、夫人子氏薨。	
9 鄭人伐衛。	9 『鄭人伐衛』、討公孫滑之亂也。

\*8 長曆「戊申、衛州吁弑其君完。三月十七日也。有日而無月也」。

經においては、6・8が無傳之經となっている。

傳の方は有經之傳だけで構成されている。各章は『』で示したように經文を引用し、それにごく簡単な説明を施している。經文引用部の直後に置かれ、經を解説する「××也」は、傳に最も普遍的に見られる「解經」形式である。1「戎請盟、公辭」・4「戎請盟」以外の解經の部分は、句法からいって經文から切り離し得ない。その意味において、隱二傳各章は典型的な「解經」形式であるといつてよい。これらは經に記された事件の歴史的背景を説明するものであり、經に対する「望文生義」によって作文しようものではありえず、従って經以外の独自の原資料の存在が示唆される。その點は後述する隱元傳3に典型的な「説話」形式と選ぶところはない。「解經」を「説話」から分かつものは結局のところ、經文引用部との句法上の不可分性である。

ここで注目したいのは、隱二傳各章における年時月日のありかたである。すなわち、1は經文を完全に引用しているが、2・4では經「夏五月、莒人入向」「秋八月庚辰、公及戎盟于唐」の下線部、すなわち章の中間部分が省略されている。年時月日についていえば、傳においても年は不可缺であり、時についてはそれに屬する事件がある限りは保存される。傳7は、無傳之經である經6「冬十月」の「冬」を流用している。

ところが、月日については、2「五月」・4「八月庚申」がその前に2「夏」・4「秋」をもつように、紀時に後續すること、すなわち章の中間に位置することが多いため、往々にして省略される。逆に5「九月」のように章の冒頭に位置するものは傳において保存されることが多い。結果的に隱二傳では、月日はこの「九月」以外、全て省略されているのである。

ここで私見を披露するならば、この隱二傳のような解經形式に終始するいわば『原左傳』ともいべきものが存在し、『左傳』の編纂に際しては、經を直接参照することなく、『原左傳』が用いられることが往々にしてあったものと思われる。そのことは隱三の經傳に窺われる。

* 1 三年春王二月己巳、日有食之。	
2 三月庚戌、天王崩。	2 三年春王三月壬戌、平王崩。赴以庚戌、故書之。

<p>3 夏四月辛卯、君氏卒。</p>	<p>3 『夏、君氏卒』。聲子也。不赴於諸侯、不反哭于寢、不耐于姑、故不曰薨。不稱夫人、故不言葬、不書姓。爲公故、曰君氏。 A 鄭武公・莊公爲平王卿士。…四月、鄭祭足帥師取溫之麥。秋、又取成周之禾。…</p>
<p>4 秋、武氏子來求賻。</p>	<p>4 『武氏子來求賻』、王未葬也。</p>
<p>5 八月庚辰、宋公和卒。</p>	<p>5 宋穆公疾、…八月庚辰、宋穆公卒、…</p>
<p>6 冬十有二月、齊侯鄭伯盟于石門。</p>	<p>6 『冬、齊鄭盟于石門』、尋盧之盟也。庚戌、鄭伯之車僨于濟。</p>
<p>* 7 癸未、葬宋穆公。</p>	<p>B 衛莊公娶于齊東宮得臣之妹、…</p>

ここで注目したいのは、有經之傳の3・6である。

3が經「夏四月辛卯、君氏卒」の「四月辛卯」を省略するのは上述の如く解經形式に往々にして認められるところである。ところが、傳は3の後に無經之傳であるAを置き、そこに「四月」が見える。3の經に「四月辛卯」とあることを想起すると、Aの「四月」には落ち着かぬものを感じる。Aの「四月」は、形式上、それ以前の部分が「四月」以前に屬することを含意する。しかしそもそも「夏」は「四月」に始まるのであるから、「四月」以前の「夏」はありえぬはずである。傳における章の排列のありかたについて、本稿では詳述しないが、紀時だけをもつ章の後に、その時に屬する紀月をもつ章を置くことは、傳において散見する一つの排列のありかたである。隱三では傳の編纂に際して、『原左傳』の「夏、君氏卒」のみが参照され、その「夏」の後に「四月」がいわば機械的に置かれているのである。

6が經「冬十有二月、齊侯鄭伯盟于石門」の「十有二月」を省略するのも同様に解經形式に由來する。6は「冬、齊鄭盟于石門、尋盧之盟也」の後にそれに關連する事件として「庚戌、鄭伯之車僨于濟」を附加するのだが、その際に月を補うことを失念している。附加の時點ですでにそれに先行して「十有二月」を省略した解經形式の『原左傳』が存在したことを示唆するものとなる。

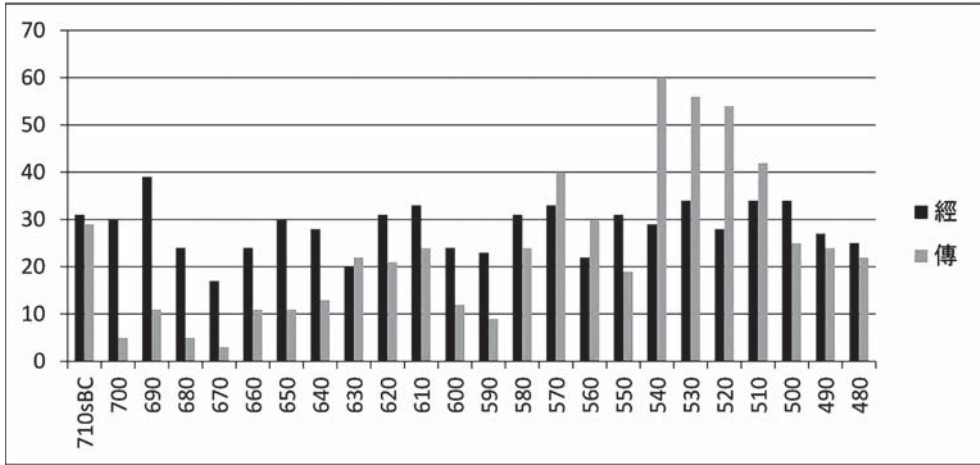


圖 1 經傳の月數

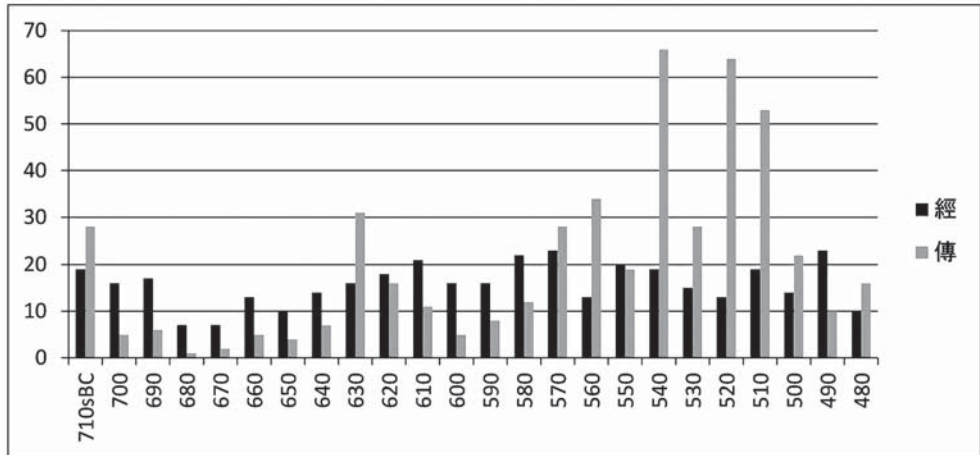


圖 2 經傳の日數

ここで經傳の月日の数を考えてみよう。『原左傳』の經文引用に由來するものとして、經の月日が省略されてしまうことは隱二經傳の分析で見たとおりである。これは實は傳の一般的傾向である。圖1・2は、719-480BCの240年間につき、經傳における10年ごとの月・日の数を示したものである。傳が經を上まわるのは、月については前630年代、前570～前560年代、前540～前510年代の70年間、日については、これに前710年代、前480年代が加わり90年間となる。要するにより多くの部分について、經は傳よりも多くの紀月・紀日を擁している。經の字數16,768字(隱公元年～哀公十六年)が傳178,552字(隱公元年～哀公二十七年)の9.4%でしかないことを想起すれば、經



は傳に對し、相對的に遙かに多くの月日を有し、年代記としての密度が遙かに高いということになる。

翻って、傳が紀月・紀日を有するとは、そもそもいかなる事態なのか。確かに、隱二傳5「九月」のように、『原左傳』の段階で經の紀月が機械的に保存され、それが傳に踏襲されたと推測される場合もある。紀月・紀日の省略にしても決して規則的ではなく、『原左傳』のいわば場当たりのな處理で、これらが存置された場合もありえたと考える。これらについて、傳の意識的な作業を見出すことはできない。しかし、たとえば隱三經傳についていえば、2は經が平王の崩を「三月庚戌」とするのに對し、傳においてはこれを「三月壬戌」とする材料を提示し、「赴」によって「庚戌」との矛盾を説明したものであり、A「四月」は無經之傳に屬し、6「庚戌」も上述の如く獨自の材料に由來する。要するにこれらの月日はいずれも獨自の材料を選択するという意識的な作業の結果として傳に採録されているのである。

これら獨自の材料に由來する月日に對し、隱三傳5「八月庚辰」は、經にも見える點が異なる。實は、隱三傳5は、事件の當事者の言論を含む「説話」の形式を採る。ここで傳における「説話」形式の最初の章である隱元傳3を見てみよう\*9。

初、鄭武公娶于申、曰武姜、生莊公及共叔段。莊公寤生、驚姜氏、故名曰寤生、遂惡之。愛共叔段、欲立之。亟請於武公、公弗許。及莊公即位、爲之請制。公曰、「制、巖邑也、虢叔死焉。佗邑唯命。」請京、使居之、謂之京城大叔。祭仲曰、「都城過百雉、國之害也。先王之制、大都不過參國之一、中、五之一、小、九之一。今京不度、非制也、君將不堪。」公曰、「姜氏欲之、焉辟害。」對曰、「姜氏何厭之有、不如早爲之所、無使滋蔓。蔓、難圖也。蔓草猶不可除、況君之寵弟乎。」公曰、「多行不義、必自斃、子姑待之。」既而大叔命西鄙北鄙貳於己。公子呂曰、「國不堪貳、君將若之何。欲與大叔、臣請事之、若弗與、則請除之、無生民心。」公曰、「無庸、將自及。」大叔又收貳以爲己邑、至于廩延。子封曰、「可矣。厚將得眾。」公曰、「不義不暱、厚將崩。」大叔完聚、繕甲兵、具卒乘、將襲鄭、夫人將啟之。公聞其期、曰、

\*9 小倉 1970 (I 德・略・質・夷 1『左傳』における霸と徳—「徳」概念の形成と展開—)。また、野間 2010 をも参照。

「可矣。」命子封帥車二百乘以伐京。京叛大叔段。段入于鄆。公伐諸鄆。五月辛丑、大叔出奔共。書曰、『鄭伯克段于鄆。』段不弟、故不言弟、如二君、故曰『克』、稱『鄭伯』、譏失教也、謂之鄭志、不言出奔、難之也、遂寘姜氏于城潁、而誓之曰、「不及黃泉、無相見也。」既而悔之、潁考叔爲潁谷封人、聞之、有獻於公、公賜之食、食舍肉、公問之、對曰、「小人有母、皆嘗小人之食矣、未嘗君之羹、請以遺之。」公曰、「爾有母遺、繄我獨無。」潁考叔曰、「敢問何謂也。」公語之故、且告之悔、對曰、「君何患焉。若闕地及泉、隧而相見、其誰曰不然。」公從之、公入而賦、大隧之中、其樂也融融、姜出而賦、大隧之外、其樂也洩洩、遂爲母子如初。君子曰、「潁考叔、純孝也、愛其母、施及莊公。詩曰、『孝子不匱、永錫爾類。』其是之謂乎。」

鄭莊公をはじめとする事件の當事者の言論をもつ典型的な「説話」形式だが、そうした全體のありかたと異質なものととして注目されるのが、「書曰」以下の下線部である。經「鄭伯克段于鄆」を引用し、解經を施す。上述の『原左傳』に由來する部分に他ならない。すでに指摘されているように、下線部直後の「遂寘姜氏于城潁」は直前の「五月辛丑、大叔出奔共」に連續する。独自の材料に由來する説話に、「書曰」を見出しとして、『原左傳』に由來する下線部が挿入されている\*10。挿入を肯定することは、從來『左傳』成書に關する議論において、本來『春秋』とは無關係で編年體でもなかった『左氏春秋』を『春秋』の年次に従って編年體に再編した上で、『春秋』の解經を作成挿入して『左傳』を構築したという、劉歆僞作説を傍證するものとして扱われてきた\*11。しかしながら、實のところ、下線部が説話に挿入されていることは、下線部の説話に對する異質性を示唆するだけであって、その後代性をただちに證するわけでは決してない。むしろ傳の編纂過程においては、『原左傳』が先行し、そこに「説話」など独自の材料が取り込まれていったと考える。經には「夏五月」と、紀月までしかないが、傳

\*10 皮錫瑞『經學通論』四/春秋/論公穀傳儀左氏傳事其事亦有不可據者不得以親見國史而盡信之「左氏於敘事中撥入書法、或首尾橫決、文理難通。如鄭伯克段于鄆傳文、太叔出奔共下、接書曰鄭伯克段于鄆、至不言出奔難之也云々、乃曰、遂寘姜氏於城潁、遂字上無所承、文理鶻突、若刪去書曰十句、但云太叔出奔共、遂寘共氏於城潁、則一氣相承矣」。また、趙生群 2000 (第二章 《左傳》與《春秋》的關係)・野間 2010 をも參照。

\*11 小倉 1991。また、野間 2010 をも參照。

は「五月辛丑」と紀日をももつ。紀日は本来、鄭自身の記録に遡るであろうから、材料としては最も古いには違いない。しかし材料の新舊や「挿入」という形式が、成書過程における先後と無前提に一致するわけではない。

隠元傳3は、經の「夏五月」に對し、獨自資料に由來する「五月辛丑」を採録するわけだが、一般に傳の「説話」部分においては經に對し月日を詳細化することが頻見する。一方、隠三傳5「八月庚辰」は經に見える以上、獨自資料を想定する必要はない。

上述の如く、『原左傳』では經文の引用に際し、その中間部分を省略することが多く、章の冒頭の紀月は存置される場合があるが、章の中間部分に位置する紀時の直後の紀月、さらに紀日は省略されやすい。従って、逆にこれらの紀月・紀日が存置されている場合、ほとんどの事例には、相應の理由を推定することが可能である。

そうした理由としてまずは、紀月・紀日そのものに意味が付與されている場合がある。隠五經7「冬十有二月辛巳、公子彊卒」に對し、傳「『冬十二月辛巳、臧僖伯卒。』公曰、叔父有憾於寡人、寡人弗敢忘。葬之加一等」は十二月辛巳を保存しているが、これは大夫の「卒」としては、隠元7經「公子益師卒」傳「眾父卒、公不與小斂、故不書日」に次ぎ、隠元の「不書日」に呼應して、特に日を書したものと思われる。

このように、經文の書法に關連して紀月・紀日そのものが意味をもったと推定される事例には、もっぱら解經に特化した『原左傳』をそのまま踏襲したものが多く含まれていることが容易に推測される。傳の段階で創作されたものにしても、傳の關心は同じく經文の書法にあるのであり、經文の記述する事件に對する關心をそこに見出すことはできない。

ところが、諸侯の卒については、隠三と比較的近いところでは、

桓十經1「春王正月庚申、曹伯終生卒」傳「春、曹桓公卒」

桓十一經2「夏五月癸未、鄭伯寤生卒」傳「夏、鄭莊公卒」

などが紀時しかとどめていないように、『原左傳』に由來する經の省略が傳に踏襲されていることが多い。諸侯の卒につき紀日まで保存することは稀であり、それどころか無傳之經に屬することがより一般的である。「八月庚辰」には解經の必要は認められない。むしろ「説話」としての記述の詳細化が志向され、『原左傳』の段階で省略されていた月日を經からあらためて採録したものとなろう。それは「五月辛丑」が獨自資料

から採録されたのと同様に、經文の記述する事件そのものに對する關心を強く示すものとなる。

ここで、經傳の字數を掲げると圖3の如くである。

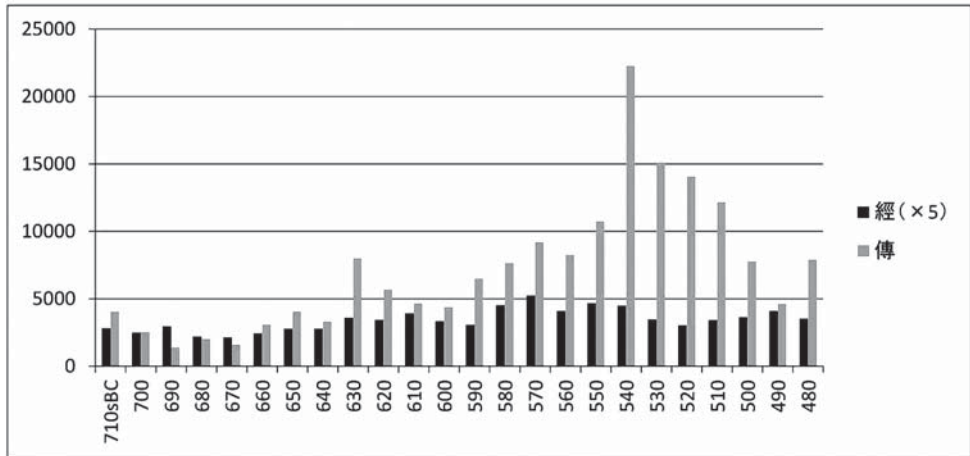


圖3 經傳の文字數

比較の便宜に供すべく、經の字數は5倍にして表示している。240年間の推移を通観すると、經に比べて傳の字數の増減が甚だしいことは明かであろう。傳の字數の動向をまとめておくと、前710年代がその後に比べて多く、ついで前630年代が前後に比べて多く、前590年代から前550年代に漸増、前540年代に急増し、前530～前490年代には漸減し、前480年代には再び増加に轉じている。細部に入りがあるものの、上掲の月數・日數と類似した増減をたどっている。

字數、すなわち記述の密度の大小は、傳の關心の強弱に正比例するはずである。字數の多い年代には、傳の關心をより強く引く事件がより多く、月日を多く含んだ材料がより多く採録される、あるいはそれらの事件に對する記述の詳細化が志向され、『原左傳』の段階では省略されていた經の月日があらためて採録されるといったことがあったものと思われる。月數・日數と字數の増減が一定の類似を示すのは、このように説明できよう。

従って、紀月・紀日を有する章の分布やその具體的内容をたどることで、傳の關心を確認しようという見通しが立つ。以下では、傳の紀日・紀月を逐條検討することと

する。

## 第二章 『左傳』における紀月・紀日

『左傳』の記述する隱公元年（722BC）～哀公二十七年（468BC）の255年間はちょうど85年ずつに三分しうる。これを前・中・後期に見立てると、前期の末年は僖公二十二年（638BC）、中期の末年は襄公二十年（553BC）となる。後述の如く、奇しくもこれらの年次は、紀月・紀日の分布、あるいはそれらを有する章の傾向の劃期にはほぼ一致する。

### 第一節 前期前半

前期のうち、齊桓公即位の前年である莊公八年 686BC までの37年間を前半とする。

隱公元年の經傳を對照すると次の如くである。

	<p>A 惠公元妃孟子。…</p>
<p>1 元年春王正月。</p>	<p>1 『元年春王周正月』、不書即位、攝也。</p>
<p>2 三月、公及邾儀父盟于蔑。</p>	<p>2 『三月、公及邾儀父盟于蔑』、邾子克也。未王命、故不書爵。曰儀父、貴之也。公攝位而欲求好於邾、故爲蔑之盟。</p> <p>A 夏四月、費伯帥師城郎。不書、非公命也。</p>
<p>3 夏五月、鄭伯克段于鄆。</p>	<p>3 初、鄭武公娶于申、…五月辛丑、大叔出奔共。書曰、『鄭伯克段于鄆。』段不弟、故不言弟。如二君、故曰克。稱鄭伯、譏失教也。謂之鄭志、不言出奔、難之也。</p>
<p>4 秋七月、天王使宰咺來歸惠公・仲子之賵。</p>	<p>4 『秋七月、天王使宰咺來歸惠公仲子之賵。』緩、且子氏未薨、故名。天子七月而葬、同軌畢至。諸侯五月、同盟至。大夫三月、同位至。士踰月、外姻至。贈死不及尸、弔生不及哀。豫凶事、非禮也。</p>

<p>5 九月、及宋人盟于宿。</p>	<p>B 八月、紀人伐夷、夷不告、故不書。                  C 有蜚、不爲災、亦不書。                  5 惠公之季年、敗宋師于黃。公立、而求成焉。『九月、及宋人盟于宿』、始通也。                  D 冬十月庚申、改葬惠公。公弗臨、故不書。惠公之薨也、有宋師、太子少、葬故有闕、是以改葬。衛侯來會葬、不見公、亦不書。                  E 鄭共叔之亂、公孫滑出奔衛。衛人爲之伐鄭、取廩延。鄭人以王師・虢師伐衛南鄙。請師於邾、邾子使私於公子豫。豫請往、公弗許、遂行。及邾人・鄭人盟于翼。不書、非公命也。                  F 新作南門。不書、亦非公命也。</p>
<p>6 冬十有二月、祭伯來。</p>	<p>6 『十二月、祭伯來』、非王命也。</p>
<p>7 公子益師卒。</p>	<p>7 眾父卒、公不與小斂、故不書日。</p>

隱元は經 1～6 が紀月をもち、7 も 6「冬十二月」の後に置かれているので、同じく十二月に屬するものとなる。有經之傳 1～6 の全てが經の紀月を保存し、さらに傳 5 は上述の如く、獨自資料に基づく「辛丑」の紀日を加え、經の「五月」を詳細化している。

隱元は無經之傳 A～F をもち、A「夏四月」・B「八月」は紀月、D「冬十月庚申」は紀日までをもつ。さらに C は B「八月」・5「九月」の間にあるので、八月に屬することになり、E・F も D「冬十月庚申」と 6「十二月」の間にあるので、十月に屬するものと見てさしつかえない\*12。要するに隱元經傳は全ての章が紀月を有するか、特定の月への歸屬が示唆される。むしろ特殊な事例というべく、最初の年次であるため特別に詳細化されたものであろう。

ちなみに、「元年」の前の A は、本來傳 1 と一連のものであった。杜預が經傳を年次

\*12 具體例は省略するが、紀時しかもたない章は、その「時」の最後に置かれることが一般的であり、まれに冒頭に置かれる。E・F が「十月」の紀月を有していたことを傍證する。

ごとに合訂した際に\*13、紀年をその年の開始としたため、紀年以前の部分は前年に屬し、無經之傳とみなされることになった\*14。經の年時月日は基本的に章頭に置かれるが、傳はそうではない。隱元傳でも独自の年時月日をもたない7を別にすれば、「説話」形式である3は無論のこと、5・Eは年時月日からは始まっていない。紀年を含む章が同じく年から始まらなくとも一向さしつかえない。

隱公二年～莊公八年の紀月・紀日を表示すると以下の如くである。

隱二 721BC	5 九月、紀裂繻來逆女、…
隱三 720BC	2 三年春王三月壬戌、平王崩。赴以庚戌、故書之。 ◎ A 四月、鄭祭足帥師取溫之麥。 5 八月庚辰、宋穆公卒。 ◎ 6 庚戌、鄭伯之車僨于濟。
隱四 719BC	6 九月、衛人使右宰醜洩殺州吁于濮、… 7 衛人逆公子晉于邢。冬十二月、宣公即位。
隱五 718BC	◎ B 四月*15、鄭人侵衛牧、…六月、鄭二公子以制人敗燕師于北制。 4 九月、考仲子之宮、將萬焉。 7 冬十二月辛巳、臧僖伯卒。
隱六 717BC	◎ B 五月庚申*16、鄭伯侵陳、大獲。
隱七 716BC	◎ 5 秋、宋及鄭平。七月庚申、盟于宿。 ◎ A 十二月、陳五父如鄭洩盟。壬申、及鄭伯盟、…辛巳、及陳侯盟、…

\*13 春秋序「分經之年、與傳之年相附、比其義類、各隨而解之、名曰經傳集解」。

\*14 楊伯峻 1990 は當該部分につき、「此與下傳「元年春王正月不書即位、攝也」爲一傳、後人分傳之年、必以「某年」另起、故將此段提前而與下文隔絶。」と述べる。この分年の結果、傳の各年次の末尾に多く無經之傳が発生したことについては、趙生群 2000（第三章 《左傳》的無經之傳）參照。

\*15 隱五傳 B「四月」の前には傳 2「夏」が置かれるが、經 2 は「夏四月」に作る。『原左傳』が經 2 の「四月」を省略した後に、B が挿入されたことを示す。

\*16 隱六傳 B「五月庚申 57」の前には傳 2「夏」が置かれるが、經 2 は「夏五月辛酉 58」に作り、Bの方が2より一日早い。『原左傳』が經 2 の「五月辛酉」を省略した後に、B が挿入されたことを示す。

<p>隱八 715BC</p>	<p>◎ 2 三月、鄭伯使宛來歸祊、… ◎ B 四月甲辰、鄭公子忽如陳逆婦媯。辛亥、以媯氏歸。甲寅、入于鄭。 ◎ C 八月丙戌*17、鄭伯以齊人朝王、…</p>
<p>隱九 714BC</p>	<p>2 九年春王三月癸酉、大雨霖以震。書、始也。庚辰、大雨雪、亦如之。書、時失也。凡雨、自三日以往爲霖。平地尺爲大雪。 ◎ A 十一月甲寅、鄭人大敗戎師。</p>
<p>隱十 713BC</p>	<p>◎ 1 十年春王正月、公會齊侯・鄭伯于中丘。癸丑、盟于鄧。 ◎ 2 夏、五月、羽父先會齊侯・鄭伯伐宋。六月戊申、公會齊侯・鄭伯于老桃。 ◎ 3 壬戌、公敗宋師于菅。庚午、鄭師入郟。辛未、歸于我。庚辰、鄭師入防。辛巳、歸于我。 ◎ 4 秋七月庚寅、鄭師入郟。…八月壬戌、鄭伯圍戴。癸亥、克之。 ◎ A 九月戊寅、鄭伯入宋。</p>
<p>隱十一 712BC</p>	<p>◎ 3 鄭伯將伐許、五月甲辰、授兵于大宮。…秋、七月、公會齊侯・鄭伯伐許。庚辰、傅于許。…壬午、遂入許。 ◎ C 冬十月、鄭伯以虢師伐宋。壬戌、大敗宋師、… 4 十一月、公祭鍾巫、齊于社圃、館于寯氏。壬辰、羽父使賊弑公子寯氏、立桓公、…</p>
<p>桓元 711BC</p>	<p>◎ 2 三月、鄭伯以璧假許田、… ◎ 3 夏四月丁未、公及鄭伯盟于越、…</p>
<p>桓二 710BC</p>	<p>4 夏四月、取郟大鼎于宋。戊申、納于大廟、… 5 秋七月、杞侯來朝、… 7 九月、入杞、…</p>
<p>桓四 708BC</p>	<p>1 四年春正月、公狩于郎。書時、禮也。</p>

\*17 隱八傳 C 「八月丙戌」が 5・7 の間にあるのは、經 5 「秋七月庚午」・7 「九月辛卯」が参照されたものに相違ない。ところが傳 5 は「秋」のみ、7 には月日がない。傳が参照した月日を選択的にしか存置しないことの例證となる。



桓五 707BC	1 五年春正月甲戌己丑*18、陳侯鮑卒。
桓六 706BC	◎ B 鄭大子忽帥師救齊。六月、大敗戎師、… 5 九月丁卯、子同生。
桓十一 701BC	◎ 4 秋九月丁亥、昭公奔衛。己亥、厲公立。
桓十四 698BC	5 秋八月壬申、御廩災。乙亥、嘗。書、不害也。
桓十五 697BC	◎ 5 六月乙亥、昭公入。
桓十六 696BC	◎ 1 十六年春正月、會于曹、謀伐鄭也。 ◎ 3 秋七月、公至自伐鄭、… 5 十一月、左公子洩・右公子職立公子黔牟。惠公奔齊。
桓十七 695BC	8 冬十月朔、日有食之。不書日、官失之也。 ◎ A 初、鄭伯將以高渠彌爲卿。…辛卯、弑昭公而立公子亶。
桓十八 694BC	2 夏四月丙子、享公。使公子彭生乘公、公薨于車。 ◎ A 七月戊戌、齊人殺子亶而轅高渠彌。…
莊元 693BC	2 三月、夫人孫于齊。
莊三 691BC	3 夏五月、葬桓王、緩也。
莊四 690BC	A 四年春王正月、楚武王荆尸、…
莊八 686BC	5 冬十二月*19、齊侯游于姑棼、…

まず、隱二 5「九月」・隱五 4「九月」・桓二 7「九月」・莊元 2「三月」は經の章の冒頭にあった紀月がそのまま存置されたものと見てさしつかえない。

ついで、隱五 7「冬十二月辛巳」が書法に關連して存置されたものであることは上

\*18 正月甲戌につき、杜預注は「四年十二月二十一日也、書于正月、從赴」とし、長曆は桓公五年正月の次に閏月を置くが、つとに顧炎武『日知錄』卷四/闕文が「桓公五年、春正月甲戌・己丑陳侯鮑卒、甲戌有日而无事。皆春秋之闕文」と指摘するように、「甲戌」「己丑」の間に脱文を想定すべきであろう。張女舟「春秋經朔譜」（張女舟 1987、429～550 頁）は、桓公四年十二月の次月を閏月とし、桓公五年正月甲寅 51 朔で甲戌 11 を二十一日、己丑 26 の前に二月が脱するとし、二月癸未 20 朔で己丑を七日とする。「從赴」説に問題があることについても、「列國君卒、赴告于魯而書于經。日或不合魯曆、杜曰“從赴”、説甚堅強。後人有言列國曆異、皆注“赴”字。」と指摘している。鄧積意 2009 をも参照。

\*19 莊八 5 經は「冬十有一月癸未」に作る。魯曆では莊八は建丑正月である。「十二月」は建子正月に従う原資料の紀月をそのまま用いたものであろう。

述の如くだが、同様の事例として、隱九2「春王三月癸酉、大雨霖以震。書、始也。庚辰、大雨雪、亦如之。書、時失也。凡雨、自三日以往爲霖。平地尺爲大雪」・桓四1「四年春正月、公狩于郎。書時、禮也」・桓十七8「冬十月朔、日有食之。不書日、官失之也」などは下線部に示したように、解經に月日が不可欠なものであり、桓十四5「秋八月壬申、御廩災。乙亥、嘗。書、不害也」も、「不害也」を傍證するものとして、災が嘗のわずか三日前であったことを明示すべく、壬申とその三日後の乙亥を存置したものである。「書××」という形式に明らかなように、これらに対する傳の關心は經の書法にあるのであって事件そのものにはない。事件そのものはこの年次になくとも一向さしつかえない。これらの事件は一回的かつ不可逆的な歴史的推移の構成要素ではなく、いわば超歴史的な書法を説明する素材であるに過ぎない。これらの解經形式には、『原左傳』を踏襲しただけのものも少なくないであろう。

桓五1「五年春正月甲戌己丑、陳侯鮑卒」は陳公子佗の篡立に関わり、一見すると、この時期に頻見する公位繼承紛争の一つとして傳の關心を惹いたかのようだが、事件の結末である桓六經4「蔡人殺陳佗」が無傳之經であることに明らかなように、傳は實はこの事件自體には關心をもっておらず、「甲戌己丑」という經文の特異な紀日に注目しているに過ぎない。

隱三2は周平王の崩を經が「三月庚戌」とするのに対し、傳はこれを「三月壬戌」とする材料を提示し、「赴」によって「庚戌」との矛盾を説明する。周王朝について、傳は經との矛盾を指摘することにもっぱら熱心である。また、莊三3「夏五月、葬桓王、緩也」が「五月」を存置するのは、「緩也」という時間に関わる解經に呼應する。

さらに、傳においては各年次、さらには近傍の複数の章において紀月・紀日の形式が統一されることがある。桓二7「九月、入杞」が經の章頭の紀月をそのまま存置したと推定されることは上述の如くだが、桓二5「秋七月、杞侯來朝」は、この「九月」に牽引され「七月」が補われたものであろう。事件の始末の一方のみが紀月をもつことの不均衡をむしろ無意識的に避けたものである。

これら以外は、事件自體への關心に基づく記述の詳細化の結果、月日が保存されたものと思われる。

【鄭】一見して明らかなように、◎を附した鄭に関連する章が壓倒的に多い。すでに

隠元3・Eも鄭に関わっている。傳の「説話」形式の最初の章が隠元3の鄭莊公と共叔段の内戦であることとも相まって、傳の鄭莊公への關心の強さは明かである。前期前半の無經之傳は、莊四A以外は全て鄭関係であり、有經之傳についても独自の月日が補われているものが多い。隠三6庚戌・隠八C八月丙戌・隠十2六月戊申・A九月戊寅は『春秋經』の曆（以下「魯曆」と稱する）に載らない。鄭の年代記に由来する材料を採録する際に月の換算を怠ったものと思われる\*20。

上掲の圖1～3に看取される前710年代の傳の月數・日數・字數のそれ以後に對する多さは、鄭莊公關係の記述の充實に由来する。鄭莊公の活躍はかれが周王朝の卿士であったためである\*21。傳にはそうした表現こそないが、鄭莊公が「小霸」に見立てられるのはゆえなきことではない\*22。前700年代について、傳の月數・日數・字數が減少するのは、桓公五年707BCに鄭莊公が周王朝と交戦して卿士の地位を喪失したと無関係ではない。莊公卒ののち、昭公が追放されて厲公が立ち（桓十一4）、厲公が追放されて昭公が復位し（桓十五5）、魯などが厲公を支持して鄭に出兵し（桓十六1・3）、昭公が弑殺されて子臺が立ち（桓十七A）、子臺が齊襄公に殺害される（桓十八A）と、傳は鄭の公位繼承紛争を丹念にたどるが、鄭關係の章に見える月日の數は桓公六年を境に明らかに減少している。

【魯】魯の政治史的推移に関わるものは、鄭に関連するものを除けば、魯隱公弑殺（隠十一4）・魯莊公出生（桓六5）・魯桓公殺害（桓十八2）だけであるに過ぎない。

【宋・衛】宋については、宋穆公卒と殤公即位（隠三5）、ついで桓二4「夏、四月、取郟大鼎于宋。戊申、納于大廟」は宋殤公弑殺の結果である。衛については、衛州吁殺害（隠四6）・衛宣公即位（隠四7）・衛惠公出奔（桓十六5）が見える。注目すべきは、衛州吁の桓公弑殺に関わる隠四經2「戊申」、宋殤公弑殺に関わる桓二經1「二年春二月戊申」がいずれも紀日をもつのに對し、傳がこれらをともに「春」と略することである。弑殺については、その起點より終點により強い關心をもつということになる。

【楚】莊四Aは楚武王の卒。

\*20 また隠十傳1「正月…癸丑」は魯曆には載るが、經は「二月」に作る。こちらは經が鄭年代記の紀月の換算を誤ったものであろう。

\*21 以下、春秋時代の政治史的推移については、吉本2005参照。

\*22 童書業1980。

【齊】 莊八 5 は齊襄公弑殺。

第二節 前期後半

齊桓公の即位する莊公九年 685BC から晉文公即位の前々年である僖公二十二年 638BC まで 48 年間。

莊十 684BC	4 夏六月、齊師・宋師次于郎。 5 秋九月、楚敗蔡師于莘。以蔡侯獻舞歸。
莊十二 683BC	4 冬十月、蕭叔大心及戴・武・宣・穆・莊之族、以曹師伐之。殺南宮牛于師、殺子游于宋、立桓公。
莊十四 680BC	A 六月甲子、傅瑕殺鄭子及其二子、而納厲公。 3 秋七月、楚入蔡。
莊十六 678BC	A 鄭伯治與於雍糾之亂者。九月、殺公子闕、則強鉏。
莊十九 675BC	A 十九年春、楚子禦之、…夏六月庚申、卒。
莊二十一 673BC	2 五月、鄭厲公卒。
莊二十五 669BC	3 夏六月辛未朔、日有食之。…
莊二十九 665BC	5 冬十二月、城諸及防、…
莊三十 664BC	1 夏四月丙辰、虢公入樊、執樊仲皮、歸于京師。
莊三十一 663BC	4 夏六月、齊侯來獻戎捷、非禮也。
莊三十二 662BC	A 秋七月、有神降于莘* <sup>23</sup> 。 4 八月癸亥、公薨于路寢。 5 冬十月己未、共仲使圉人犇賊子般于黨氏。
閔元 661BC	3 夏六月、葬莊公。 4 秋八月、公及齊侯盟于落姑、請復季友也。
閔二 660BC	3 秋八月辛丑、共仲使卜齋賊公于武闞。

\*23 莊三十二傳3には月日がないが、經3には「秋七月癸巳」とある。假に「秋七月」を存置しても、傳Aにすでに「秋七月」に重複するので、傳3には現れないことになる。このように、經の月日が存置されていることが推定される章は少なくないが、一方で、『原左傳』に従って月日を省略している可能性も否定できないので、表には載せないことにする。

	6 冬十二月、狄人伐衛。
僖元 659BC	7 九月、公敗邾師于偃、虛丘之戍將歸者也。
僖三 657BC	4 夏六月、雨。自十月不雨、至于五月。不曰旱、不爲災也。
僖四 656BC	A 十二月戊申* <sup>24</sup> 、縶于新城。
僖五 655BC	A 五年春王正月辛亥朔、日南至。公既視朔、遂登觀臺以望。而書、禮也。 8 八月甲午、晉侯圍上陽。…冬十二月丙子朔* <sup>25</sup> 、晉滅虢、虢公醜奔京師。
僖七 653BC	A 閏月、惠王崩。
僖九 651BC	5 九月* <sup>26</sup> 、晉獻公卒。 6 冬十月、里克殺奚齊于次。…十一月* <sup>27</sup> 、里克殺公子卓于朝。
僖十 650BC	4 夏四月、周公忌父・王子黨會齊隰朋立晉侯。
僖十四 646BC	3 秋八月辛卯、沙鹿崩。
僖十五 645BC	3 三月、盟于牡丘、尋葵丘之盟、且救徐。 4 夏五月、日有食之。… 12a 九月、…壬戌* <sup>28</sup> 、戰于韓原、… 12b 十月、晉陰飴甥會秦伯、盟于王城。…十一月、晉侯歸。丁丑、

\*24 僖五經1「五年春、晉侯殺其世子申生」傳「晉侯使以殺大子申生之故來告」とあるが、僖四傳A「十二月戊申」を晉曆の紀月と考えた方がよい。晉曆（建寅）十二月は魯曆（建子）二月に当たり、春に屬する。

\*25 僖五傳8「公曰、何時。對曰、童謠云、丙之晨、龍尾伏辰、均服振振、取虢之旂、鶉之賁賁、天策焯焯、火中成軍、虢公其奔。其九月・十月之交乎。丙子旦、日在尾、月在策、鶉火中、必是時也」によれば、「十二月丙子朔」は晉曆（建寅）十月丙子朔を魯曆（建子）に換算したものとなる。八月甲午は晉曆・魯曆いずれか確言できない。

\*26 僖九傳5「九月」の前には傳4「秋」が置かれるが、經4は「九月戊辰」に作る。『原左傳』が經4の「九月戊辰」を省略し、無傳之經である經3「秋七月乙酉」の「秋」を移した後に、Bが挿入されたことを示す。

\*27 僖九傳6「十月」を經6は「冬」、「十一月」を僖十經3は「春」に繋げる。晉曆（建寅）十月・十一月は魯曆（建子）十二月・正月に当たる。

\*28 僖十五傳12a 九月壬戌の韓の戦を經12は「十有一月壬戌」に繋げる。傳は晉曆（建寅）の紀月を保存し、經は魯曆（建子）に換算している。

	殺慶鄭而後入。
僖十六 644BC	D 冬十一月乙卯、鄭殺子華。 5 十二月、會于淮、謀郟、且東略也。
僖十七 643BC	3 秋、聲姜以公故、會齊侯于卞。九月、公至。 4 冬十月乙亥* <sup>29</sup> 、齊桓公卒。…十二月乙亥、赴。辛巳、夜殯。
僖十八 642BC	1 三月* <sup>30</sup> 、齊人殺無虧。 3 夏五月、宋敗齊師于鹹、立孝公而還。 5 秋八月、葬齊桓公。
僖二十二 638BC	2 三月、鄭伯如楚。 3 八月丁未、公及邾師戰于升陘、我師敗績。 4 冬十一月己巳朔、宋公及楚人戰于泓。 D 丙子晨、鄭文夫人聿氏・姜氏勞楚子於柯澤。…丁丑、楚子入饗于鄭、…

解經の必要から紀月・紀日が存置されたものとしては、莊二十五3「『夏六月辛未朔、日有食之、鼓、用牲于社』、非常也。唯正月之朔、慝未作、日有食之、於是乎用幣于社、伐鼓于朝」・莊二十九5「『冬十二月、城諸及防』、書、時也。凡土功、龍見而畢務、戒事也。火見而致用、水昏正而裁、日至而畢」・僖三4「『夏六月、雨』。自十月不雨、至于五月。不曰旱、不爲災也」・僖十五4「『夏五月、日有食之』。不書朔與日、官失之也。」がある。下線部に時月日に關わる記述が見えるように、解經に月日が不可缺である。

日食については僖十五4に見えるように「×月朔 [干支]」を冠することが經の書法である。傳が日食について經の時月日を基本的に保存しているのは、省略にとまなう不完全感を回避してのものでもあろう。

僖五A「春王正月辛亥朔、日南至、公既視朔、遂登觀臺以望、而書、禮也」は正月

\*29 僖十七傳4十月乙亥の齊桓公卒を經4は「十二月乙亥」に繋げる。經は魯曆（僖十七建子正月）、傳は建寅正月によるものと思われる。傳は「十二月乙亥」に「赴」したとするが、原資料「十月乙亥、齊桓公卒。辛巳、夜殯」と經文の整合を試みたものであろう。

\*30 僖十八經1には「十有八年春王正月、宋公・曹伯・衛人・邾人伐齊」とある。同じ事件を指すものとするれば、經は魯曆僖十八建丑正月、傳は建亥正月に従うものかもしれない。

朔冬至に関わるので當然ながら「春王正月辛亥朔」が記されている。

僖七 A「閏月、惠王崩」は、僖八經 4「冬十有二月丁未、天王崩」と矛盾する材料が獲得されたため、とくに月を記したものである。僖八 4「冬、王人來告喪。難故也、是以緩」はこれを「告」によって説明する。上掲隱三 2 と同様に王朝に関する經傳の矛盾を問題とするものである。

事件への關心で月日が附された事例は以下の如くだが、前期後半については前半の鄭の如き獨占的な優位を占める國はない。

【鄭】 莊十四 A および 莊十六 A は鄭厲公復位、莊二十一 2 は厲公卒に関わり、前期前半の鄭莊公以來の鄭の推移に連続する。僖十六 D の鄭の子華誅殺は、宣三 7

文公報鄭子之妃曰陳媯、生子華・子臧。子臧得罪而出。誘子華而殺之南里、使盜殺子臧於陳・宋之間。又娶于江、生公子士。朝于楚、楚人酖之、及葉而死。又娶于蘇、生子瑕・子俞彌。俞彌早卒。洩駕惡瑕、文公亦惡之、故不立也。公逐羣公子、公子蘭奔晉、從晉文公伐鄭。石癸曰、吾聞姬・媯耦、其子孫必蕃。媯、吉人也、后稷之元妃也。今公子蘭、媯甥也、天或啟之、必將爲君、其後必蕃。先納之、可以充寵。與孔將鉏。侯宣多納之、盟于大宮而立之、以與晉平。

に見えるように、僖三十四の晉文公の鄭への出兵に関わる。

【魯】 莊三十二 4・5・閔元 3・4・閔二 3 は魯莊公の卒から僖公の即位に至る公位繼承紛争である。

僖元 7・僖二十二 3 は魯の邾への出兵だが、僖元 7「九月、公敗邾師于偃」の「九月」は經の章頭の紀月が存置されたもの、また僖二十二 3「八月丁未、公及邾師戰于升陘」が月日を存置するのは、これに続く僖二十二 4「冬十一月己巳朔、宋公及楚人戰于泓」が同じく「戰」であり月日を存置することに牽引されたものであろう。

【齊】 莊十五 1「十五年春、復會焉、齊始霸也」をはじめとして、傳は齊桓公の霸を明言してはいるが、月日について桓公に関わるものは決して多くない。傳の齊桓公に對する關心の低さを示唆するものである。莊十 4 は桓公即位にともなう齊・宋と魯の戰爭、莊三十一 4 は對山戎戰にともなう魯への獻捷、閔元 4 は魯の閔公即位にともなう落姑の盟、閔二 6 は衛への救援に歸結する狄による衛の滅亡、そして僖十五 3 の牡丘の盟、僖十六 5 の淮の會、僖十七 3 の魯僖公釋放は桓公最末期の事跡であり、淮水

方面への進出は次の宋襄公に繼續する。僖十七 4 は齊桓公の卒、僖十八 1・3 は齊孝公即位に至る公位繼承紛争、僖十八 5 が桓公の葬である。

【宋】 莊十二 4 の宋閔公弑殺、桓公即位はむしろ前期前半の情況に連なる。

宋襄公は、齊桓公卒後、中原制覇を圖った。僖十八 1・3 は齊桓公卒後の公位繼承紛争への宋襄公の介入を記し、僖二十二 2 の鄭の楚への朝は、4 の泓の戦の直接的な原因である。

【晉】 莊三十 1・ 莊三十二 A は虢に關わるが、これは僖五 8 の晉の虢征服に連なる。晉については、僖四 A は晉の太子申生の自殺と公子重耳（文公）・公子夷吾（惠公）の出奔、僖九 5・6・ 僖十 4 は晉獻公卒から惠公即位に至る公位繼承紛争、僖十四 3 沙鹿崩は、僖十五 12a・12b の韓の戦における晉の敗戦に連なる。

【楚】 莊十 5・ 莊十四 3 は楚文王の蔡への出兵、莊十九 A は楚文王卒に關わる。降つて僖二十二 2・4・D は楚成王の泓の戦における勝利に關わる。

### 第三節 中期前半

晉文公の即位の前年である僖公二十三年 637BC から鞏の戦の前年である成公元年 590BC まで 48 年間。

僖二十三 637BC	2 夏五月、宋襄公卒、… A 九月、晉惠公卒。 4 十一月、杞成公卒。…。
僖二十四 636BC	A 二十四年春王正月、秦伯納之、…二月甲午、晉師軍于廬柳。…辛丑、狐偃及秦晉之大夫盟于郟。壬寅、公子入于晉師。丙午、入于曲沃。丁未、朝于武宮。戊申、使殺懷公于高梁。…三月、晉侯潛會秦伯于王城。己丑晦、公宮火。 B 鄭子華之弟子臧出奔宋、好聚鷓冠。鄭伯聞而惡之、使盜誘之。八月、盜殺之于陳・宋之間。
僖二十五 635BC	1 正月丙午、衛侯燬滅邢、…



	<p>A 三月甲辰、次于陽樊。…夏四月丁巳、王入于王城。…戊午、晉侯朝王。</p> <p>7 衛人平莒于我。十二月、盟于洮、…</p>
僖二十六 634BC	<p>1 二十六年春王正月、公會莒茲平公・甯莊子盟于向、…</p>
僖二十八 632BC	<p>1 正月戊申、取五鹿。二月、晉郤穀卒。</p> <p>3 三月丙午、入曹。</p> <p>4 夏四月戊辰、晉侯・宋公・齊國歸父・崔夭・秦小子憇次于城濮。…己巳、晉師陳于莘北、…及癸酉而還。甲午、至于衡雍、作王宮于踐土。…五月丙午、晉侯及鄭伯盟于衡雍。丁未、獻楚俘于王、…己酉、王享醴、…</p> <p>7 癸亥<sup>*31</sup>、王子虎盟諸侯于王庭、…</p> <p>10 六月、晉人復衛侯。</p> <p>A 壬午、濟河。…秋七月丙申、振旅、愷以入于晉。</p> <p>15 壬申、公朝于王所。</p> <p>18 丁丑<sup>*32</sup>、諸侯圍許。</p>
僖三十 630BC	<p>4 九月甲午、晉侯・秦伯圍鄭。</p>
僖三十一 629BC	<p>3 夏四月、四卜郊、不從、乃免牲、…</p>
僖三十二 628BC	<p>4 冬、晉文公卒。庚辰<sup>*33</sup>、將殯于曲沃、…</p>
僖三十三 627BC	<p>3 夏四月辛巳、敗秦師于殽、…</p> <p>7 八月戊子、晉侯敗狄于箕。</p>
文元 626BC	<p>A 於是閏三月、非禮也。</p> <p>4 夏四月丁巳、葬僖公。</p>

\*31 踐土の盟を僖二十八傳7は五月癸亥に繋げるが、經7は癸丑とする。

\*32 僖二十八傳15壬申は、經の段階ですでに紀月を脱落している。僖二十八傳18丁丑も同じく紀月を缺く。

\*33 僖三十二傳4庚辰は月を脱落している。經4には「冬十有二月己卯、晉侯重耳卒」とある。『原左傳』の段階で「十有二月己卯」を省略した後、傳が「庚辰」以下を挿入した際に紀月を補うことを失念したものである。

	<p>6 五月辛酉朔、晉師圍戚。六月戊戌、取之、獲孫昭子。</p> <p>10 冬十月、以宮甲圍成王。</p>
文二 625BC	<p>1 二年春、秦孟明視帥師伐晉、以報殺之役。二月、晉侯禦之。… 甲子、及秦師戰于彭衙、…</p> <p>2 丁丑、作僖公主。</p> <p>3 夏四月己巳*<sup>34</sup>、晉人使陽處父盟公、…</p> <p>4 六月、穆伯會諸侯、及晉司空士穀盟于垂隴、晉討衛故也。</p> <p>6 秋八月丁卯、大事于大廟、躋僖公、…</p>
文三 624BC	<p>2 夏四月乙亥、王叔文公卒、…</p>
文六 621BC	<p>4 八月乙亥、晉襄公卒。</p> <p>6a 九月、賈季使續鞫居殺陽處父。</p> <p>5 冬十月、襄仲如晉、葬襄公。</p> <p>6b 十一月丙寅*<sup>35</sup>、晉殺續簡伯。</p> <p>7 閏月不告朔、非禮也。</p>
文七 620BC	<p>2 三月甲戌、取須句、…</p> <p>4 夏四月、宋成公卒。</p> <p>5 戊子、敗秦師于令狐、至于剝首。己丑、先蔑奔秦、…</p> <p>7 八月、齊侯・宋公・衛侯・鄭伯・許男・曹伯會晉趙盾、盟于扈、…</p>
文九 618BC	<p>4 九年春王正月己酉、使賊殺先克。乙丑*<sup>36</sup>、晉人殺先都・梁益耳。</p>

\*34 文二傳3「四月己巳」に對し、經3は「三月乙巳」に作る。杜預注は「經傳必有誤」とするが、『會箋』は、「經書魯侯如晉之日、故曰三月乙巳。傳公如晉三字、釋經所以書三月乙巳也。然後云夏四月己巳、乃書其盟日。杜不達傳意、疑經傳有誤、粗矣」とする。

\*35 文六經6は經5「冬十月」のあとに「晉殺其大夫陽處父。晉狐射姑出奔狄」を置く。文六傳6b十一月丙寅は、杜預注が「十一月無丙寅、十二月八日也。日月必有誤」と指摘するように、魯曆（建子正月）に合わない。「九月」「十一月丙寅」は晉曆（建丑正月）をそのまま保存したもので、魯曆では「十月」「十二月丙寅」に当たり、冬に屬する。

\*36 文九經4は經3「二月」のあとに「晉人殺其大夫先都」を置く。傳4の正月乙丑は晉曆（建丑）に従うものであろう。一方で、傳6が三月甲戌に繋げる「晉人殺箕鄭父・士穀・蒯得」を経6は5「三月」の後に置き、こちらは魯曆（建子）に換算済みとなっている。

	<p>3 二月、莊叔如周葬襄王。</p> <p>6 三月甲戌、晉人殺箕鄭父・士穀・蒯得。</p>
文十 617BC	<p>3 穆王聞之、五月、殺鬬宜申及仲歸。</p> <p>5 秋七月、及蘇子盟于女栗、頃王立故也。</p>
文十一 616BC	<p>5 冬十月甲午、敗狄于鹹、…</p>
文十二 615BC	<p>3 二月、叔姬卒。不言杞、絕也。書叔姬、言非女也。</p> <p>7 十二月戊午、秦軍掩晉上軍、…</p>
文十三 614BC	<p>3 五月、邾文公卒。</p> <p>5 秋七月、大室之屋壞。</p>
文十四 613BC	<p>3 夏五月、昭公卒、舍即位。</p> <p>4 六月、同盟于新城、從於楚者服、且謀邾也。</p> <p>9a 秋七月乙卯<sup>*37</sup>夜、齊商人弒舍而讓元。</p> <p>C 八月、二子以楚子出、將如商密。廬戢黎及叔麋誘之、遂殺鬬克及公子燮。</p> <p>8 九月、卒于齊。</p>
文十五 612BC	<p>1 三月、宋華耦來盟。</p> <p>5 六月辛丑朔、日有食之、…</p> <p>7 晉卻缺以上軍下軍伐蔡、…戊申、入蔡、…</p> <p>9 冬十一月、晉侯・宋公・衛侯・蔡侯・鄭伯・許男・曹伯盟于扈、…</p>
文十六 611BC	<p>1 十六年春王正月、及齊平。</p> <p>2 夏五月、公四不視朔、…</p> <p>3 秋八月辛未、聲姜薨、毀泉臺。</p> <p>6 冬十一月甲寅、宋昭公將田孟諸。</p>

\*37 文十四傳 9a「七月乙卯」を經 9 は經 8「九月甲申」の後に置き、傳 9b は九月に告したものとするが、建寅正月の七月は魯曆（建子）九月に當たる。また杜預は「七月無乙卯、日誤」とする。たとえば己卯は魯曆九月に存在する。

文十七 610BC	2 夏四月癸亥、葬聲姜。 3 齊侯伐我北鄙、襄仲請盟。六月、盟于穀。 B 冬十月、鄭大子夷・石楚爲質于晉。
文十八 609BC	1 二月丁丑、公薨。 3 夏五月、公游于申池。 4 六月、葬文公。 6 冬十月、仲殺惡及視、而立宣公。 A 十二月、宋公殺母弟須及昭公子、…
宣元 608BC	2 元年春王正月、公子遂如齊逆女。尊君命也。 3 三月、遂以夫人婦姜至自齊。尊夫人也。 8 六月、齊人取濟西之田、…
宣二 607BC	1 二年春、鄭公子歸生受命于楚伐宋、…二月壬子、戰于大棘、宋師敗績、… 4 秋九月、晉侯飲趙盾酒、…乙丑、趙穿攻靈公於桃園。…壬申 <sup>*38</sup> 、朝于武宮。
宣四 606BC	A 秋七月戊戌、楚子與若敖氏戰于皋澚。
宣五 605BC	3 秋九月、齊高固來逆女、自爲也。故書曰逆叔姬、即自逆也。
宣十 599BC	9 滕人恃晉而不事宋、六月、宋師伐滕。
宣十二 597BC	3 夏六月、晉師救鄭。…乙卯、王乘左廣以逐趙旃。…丙辰、楚重至於郟、…辛未、鄭殺僕叔及子服。
宣十四 595BC	4 秋九月、楚子圍宋。
宣十五 594BC	2 夏五月、楚師將去宋。 3 六月癸卯、晉荀林父敗赤狄于曲梁。辛亥、滅潞。 4 秋七月、秦桓公伐晉、次于輔氏。壬午、晉侯治兵于稷、…
宣十六 593BC	1 十六年春、晉士會帥師滅赤狄甲氏及留吁・鐸辰。三月、獻狄俘。

\*38 宣二傳4「壬申」は九月に入らず、傳A「冬」の前に置かれる。「十月」を置き忘れたものである。

	晉侯請于王。戊申、以馘冕命士會將中軍、…
宣十七 592BC	6 秋八月、晉師還。
成元 590BC	A 元年春、晉侯使瑕嘉平戎于王、…三月癸未、敗績于徐吾氏。

文九 3「二月」・文十二 3「二月」・文十四 8「九月」・文十五 1「三月」は經の章の冒頭にあったため存置されたものであろう。宣元 3「三月、遂以夫人婦姜至自齊。尊夫人也」も同様であろうが、宣元 2「元年春王正月、公子遂如齊逆女。尊君命也」が無傳之經である宣元 1「元年春王正月、公即位」の「元年春王正月」をわざわざ用いているのは、宣元 3 と形式を同じくして、これらが一對であることを強調したものであろう。

文三 2「夏四月乙亥、王叔文公卒」は、經に「夏五月、王子虎卒」とあり、成元 A「三月癸未、敗績于徐吾氏」は、經に「秋、王師敗績于茅戎」とある。いずれも王朝関連で、上掲の事例と同様に、經と矛盾する獨自資料が獲得されたため、紀日まで置いているのであろう。

月日自体に意味が付与されて存置されたものとしては、僖三十一 3「夏四月、四卜郊、不從、乃免牲」・文元 A「於是閏三月、非禮也」・文六 7「閏月不告朔、非禮也」・文十五 5「六月辛丑朔、日有食之」・文十六 2「夏五月、公四不視朔」がある。

「郊」については、襄七 2

夏四月、三卜郊、不從、乃免牲。孟獻子曰、吾乃今而後知有卜筮。夫郊祀后稷、以祈農事也。是故啟蟄而郊、郊而後耕。今既耕而卜郊、宜其不從也。

に見えるように、時期が問題となるので、紀月は不可缺である。

僖二十三 4

十一月、杞成公卒。書日子、杞、夷也。不書名、未同盟也。凡諸侯同盟、死則赴以名、禮也。赴以名、則亦書之、不然則否、辟不敏也。

は經の書法を問題にするものだが、「十一月」の存置は、同年に 2「夏五月、宋襄公卒」・A「九月、晉惠公卒」と紀月をもつ諸侯の卒が並んだことに牽引されたものであろう。

【晉】中期前半以降、晉の霸者體制の形成に伴い、晉に關連する章が壓倒的に多くなる。僖二十三 A は晉惠公卒、僖二十四 A は晉文公即位、僖二十五 A は王子帶の亂の平

定である。

僖二十五 1 は衛の邢征服、僖二十五 7・僖二十六 1 は衛・魯の同盟である。この結果、齊と魯・衛が交戦し、魯の請援を承けた楚が北上し、晉と衝突する。僖二十八 1・3・4・7・10・A は城濮の戦ついで踐土の盟に関わり、僖二十八 15・18 は温の會とそれに續く許への出兵、僖三十四 4 は鄭への出兵である。僖二十四 B の鄭の子臧殺害は、僖十六 D の子華殺害と一連の事件であり、上述の如く、この晉の對鄭出兵に関わる。

前 630 年代の日數・字數が前後に比べて突出しているのは、僖二十四 A・僖二十五 A および僖二十八の晉文公關連の記述に基づく。

僖三十二 4 は晉文公卒、僖三十三 3 は秦を破った殽の戦、僖三十三 7 は狄を破った箕の戦、文元 6 は朝を怠った衛への出兵、文二 1 は秦との彭衙の戦、文二 3 は朝を怠った魯との盟、文二 4 は垂隴の盟であり、これらは襄公時代の晉の推移を記述する。

文六 4・5 は襄公卒とその葬、文六 6a・6b は狐射姑の出奔に至る内紛である。文七 5 の令狐の戦は、靈公を擁立した晉が、公子雍を護送した秦を破ったもの。文七 7 の扈の盟は靈公即位を契機とする。ついで文九 4・6 はふたたび晉の内紛である。文十二 7 は、秦との河曲の戦、文十三 3 邾文公卒は、文十四 4 新城の盟の原因となる。

文十五 7 は蔡への出兵。文十五 9 の扈の盟では晉は齊の賂を受けて魯を支援せず、文十六 6 の宋昭公弑殺、文公即位に際しても、やはり宋の賂を受けている。このため、文十七 B で晉に質を送っていた鄭も離反し、宣二 1 の大棘の戦では楚の命を受けた鄭が宋を破っている。宣二 4 晉靈公弑殺ののちも、晉霸の頽勢は續き、宣十 9 は晉を恃んだ滕を宋が伐ったものであり、宣十二 3 は邲の戦における楚への大敗を記す。しかし、晉はこののち霸權の再建を進める。宣十五 3・宣十六 1 は赤狄、宣十五 4 は秦への勝利を記し、宣十七 6 の斷道の盟は成二の鞏の戦に連なる齊に對する強硬策を記す。

【魯】文元 4 「葬僖公」・文二 2 「作僖公主」・文二 6 「大事于大廟、躋僖公」と、傳は一連の儀禮の記述に熱心である。一體、僖公に先立つ四公のうち隱・桓・閔は殺害され、莊公はその死後、繼承紛争が発生した、これらに望むべくもなかった僖三十一 D 「凡君薨、卒哭而祔、祔而作主、特祀於主、烝嘗禘於廟」の禮がはじめて實現されたためであろう。文十六 3・文十七 2 が僖公夫人聲姜の薨・葬を記すのも、この僖公關連の記述と一連のものであろう。

魯は僖二十八 15 の濫の會に参加したものの、晉霸は中原にはなお十分には浸透せず、文二 3 の陽處父との盟は、不朝を責めた晉が文公を辱めたものとする。文七 2 は魯の須句奪取だが、文七 1 「七年春、公伐邾、問晉難也」は、これを晉の内紛に乗じたものとする。文十 5 「秋七月、及蘇子盟于女栗、頃王立故也」は王朝との盟、文十一 5 は狄への勝利で、魯独自の「尊王攘夷」を記し、文十三 5 は、周公廟の屋根が落ちたことで魯の怠慢を非難する。いずれも間接的に晉霸の頹勢を示唆したものであろう。文十五 9 の扈の盟において、晉は、魯に侵攻した齊への制裁を謀ったが、齊の賂でこれを取りやめ、やむなく魯は文十六 1 の陽穀の會において齊と講和する。文十七 3 の穀の盟も同様に齊の侵攻に迫られたものである。文十八 1・4・6 は文公の薨のち宣公即位に至る紛争を記す。宣元 8 は宣公への齊の支持を求め、かつて晉に與えられた濟西の田を齊に割譲したことを記す。宣五 3 は齊の卿・高固に迫られ叔姫を嫁がせたものである。

【楚】 文元 10 は楚成王弑殺・穆王即位。文十 3 は穆王の鬬宜申・仲歸誅殺、文十四 C は莊王即位時における鬬克・公子燮の造反、宣四 A は莊王の若敖氏討滅である。宣十二 3 は晉を大破した邲の戦、宣十四 4・宣十五 2 は宋攻略を記す。

【齊】 文十四 3 は齊昭公卒と公子舍の即位、文十四 9a は公子商人（懿公）の公子舍弑殺、文十八 3 は懿公弑殺と惠公即位である。

【宋】 僖二十三 2 は宋襄公卒、文七 4 は宋成公卒と昭公即位、文十六 6 は宋昭公弑殺と文公即位。文十八 A は昭公餘黨の肅清である。

#### 第四節 中期後半

鞏の戦のあった成公二年 589BC から、欒氏出奔の前年にあたる襄公二十年 553BC まで 37 年間。

成二 589BC	<p>3 六月壬申、師至于靡笄之下。…癸酉、師陳于鞏。</p> <p>4 秋七月、晉師及齊國佐盟于爰婁、…</p> <p>5 八月、宋文公卒。始厚葬、用蜃炭、益車馬、始用殉。重器備、槨有四阿、棺有輪檜。君子謂、華元・樂舉、於是乎不臣。…</p>
----------	--

	<p>6 九月*<sup>39</sup>、衛穆公卒、晉二子自役弔焉、哭於大門之外。衛人逆之、婦人哭於門內、送亦如之。遂常以葬。</p> <p>9 十一月、公及楚公子嬰齊・蔡侯・許男・秦右大夫說・宋華元・陳公孫寧・衛孫良夫・鄭公子去疾及齊國之大夫盟于蜀。</p>
成三 588BC	<p>12 冬十一月、晉侯使荀庚來聘、且尋盟。衛侯使孫良夫來聘、且尋盟。…丙午、盟晉、丁未、盟衛、禮也。</p> <p>B 十二月甲戌、晉作六軍。</p>
成四 587BC	<p>9 冬十一月、鄭公孫申帥師疆許田、…</p>
成五 586BC	<p>B 許靈公愬鄭伯于楚。六月、鄭悼公如楚訟、不勝。楚人執皇戌及子國。故鄭伯歸、使公子偃請成于晉。秋八月、鄭伯及晉趙同盟于垂棘。</p> <p>6 十一月己酉、定王崩。</p>
成六 585BC	<p>2 二月、季文子以鞞之功立武宮、非禮也。</p> <p>4 三月、晉伯宗・夏陽說・衛孫良夫・甯相・鄭人・伊維之戎・陸渾・蠻氏侵宋、…</p> <p>B 夏四月丁丑、晉遷于新田。</p> <p>7 六月、鄭悼公卒。</p>
成七 584BC	<p>5 八月、同盟于馬陵、尋蟲牢之盟、且莒服故也。</p>
成八 583BC	<p>6 六月、晉討趙同・趙括。</p>
成九 582BC	<p>4 二月、伯姬歸于宋。</p> <p>11 冬十一月、楚子重自陳伐莒、…戊申、楚入渠丘。…庚申、莒潰。</p> <p>C 十二月、楚子使公子辰如晉、…</p>
成十 581BC	<p>3 鄭公子班聞叔申之謀。三月、子如立公子緡。夏四月、鄭人殺緡、立髡頑。子如奔許。…五月、晉立大子州蒲以爲君、而會諸侯伐鄭。…辛巳、鄭伯歸。</p> <p>5 六月丙午、晉侯欲麥、…</p>

\*39 成二經は5「八月壬午、宋公鮑卒」のあとに6「庚寅、衛侯速卒」を置く。傳6は「九月」を補っている。



	B 鄭伯討立君者、戊申、殺叔申・叔禽。
成十一 580BC	1 十一年春王三月、公至自晉。晉人以公爲貳於楚、故止公。公請受盟、而後使歸。
成十二 579BC	2 夏五月、晉士燮會楚公子罷・許偃。癸亥、盟于宋西門之外、… A 十二月、晉侯及楚公子罷盟于赤棘。
成十三 578BC	2a 三月、公如京師。 3 夏四月戊午、晉侯使呂相絕秦。…五月丁亥、晉師以諸侯之師及秦師戰于麻隧。 A 六月丁卯夜、鄭公子班自訾求入于大宮、不能、殺子印・子羽、反軍于市。己巳、子駟帥國人盟于大宮、遂從而盡焚之、殺子如・子駘・孫叔・孫知。
成十四 577BC	4 八月、鄭子罕伐許、敗焉。戊戌、鄭伯復伐許。庚子、入其郛。許人平以叔申之封。 5 九月、僑如以夫人婦姜氏至自齊。舍族、尊夫人也。 6 冬十月、衛定公卒。
成十五 576BC	5 夏六月、宋共公卒。 7 秋八月、葬宋共公。…冬十月*40、華元自止之、… 8 十一月、會吳于鍾離、始通吳也。 9 許靈公畏偃于鄭、請遷于楚。辛丑、楚公子申遷許于葉。
成十六 575BC	2 夏四月、滕文公卒。 6 戊寅、晉師起。鄭人聞有晉師、使告于楚、…五月、晉師濟河。…六月、晉・楚遇於鄆陵。…甲午晦、楚晨壓晉軍而陳。…癸巳*41、

\*40 成十五傳7は華元の出奔を「冬十月」に繋げるが、經7は「秋八月庚辰、葬宋共公。宋華元出奔晉。宋華元自晉歸于宋。宋殺其大夫山。宋魚石出奔楚」に作り、經8「冬十有一月」によれば、華元出奔は形式的には「秋」に屬する。この場合、經の「秋八月庚辰」は「葬宋共公」のみに繋がり、「宋華元出奔晉」以下は一連の事件として「葬宋共公」の後に置かれていることになる。

\*41 成十六傳6癸巳は甲午の前日であり、癸巳以下は逸話を挿入したものとなる。

	<p>潘尪之黨與養由基蹲甲而射之、徹七札焉。</p> <p>10 七月、公會尹武公及諸侯伐鄭。…戊午、鄭子罕宵軍之、宋·齊·衛皆失軍。</p> <p>12 九月、晉人執季文子于茗丘。</p> <p>13 冬十月、出叔孫僑如而盟之、僑如奔齊。</p> <p>14 十二月、季孫及郤犇盟于扈。歸刺公子偃、召叔孫豹于齊而立之。</p>
<p>成十七 574BC</p>	<p>1 十七年春王正月、鄭子駟侵晉虛·滑。衛北宮括救晉、侵鄭、至于高氏。夏五月、鄭太子髡頑·侯孺爲質於楚、楚公子成·公子寅戍鄭。</p> <p>A 六月戊辰、士燮卒。</p> <p>3 乙酉、同盟于柯陵、尋戚之盟也。</p> <p>5 秋七月壬寅、別鮑牽而逐高無咎。</p> <p>8 冬、諸侯伐鄭。十月庚午、圍鄭。楚公子申救鄭、師于汝上。十一月、諸侯還。</p> <p>10 壬申、至于狸脈而占之、…</p> <p>C 十二月、盧降。</p> <p>13 壬午、胥童·夷羊五帥甲八百、將攻郤氏。</p> <p>D 閏月乙卯晦<sup>*42</sup>、欒書·中行偃殺胥童。</p>
<p>成十八 573BC</p>	<p>2 十八年春王正月庚申、晉欒書·中行偃使程滑弑厲公、…庚午、盟而入、…辛巳、朝于武宮、…</p> <p>3 齊爲慶氏之難故、甲申晦、齊侯使士華免以戈殺國佐于內宮之朝。</p> <p>A 二月乙酉朔、晉侯悼公即位于朝、…</p> <p>5 夏六月、鄭伯侵宋、…</p> <p>B 七月、宋老佐·華喜、圍彭城、…</p> <p>8 八月、邾宣公來朝、即位而來見也。</p> <p>10 己丑、公薨于路寢、言道也。</p>

\*42 成十七傳 D「閏月乙卯晦」を成十八經 1 は「正月」に繋げる。杜預經注は「從告」とする。

	<p>11 冬十一月、楚子重救彭城、伐宋。</p> <p>13 十二月、孟獻子會于虛杙、謀救宋也。</p> <p>14 丁未、葬我君成公、…</p>
襄元 572BC	<p>2 元年春己亥*43、圍宋彭城。…齊人不會彭城、晉人以爲討。二月、齊太子光爲質於晉。</p> <p>3 夏五月、晉韓厥・荀偃、帥諸侯之師伐鄭、…</p> <p>6 九月、邾子來朝、禮也。</p>
襄二 571BC	<p>4 秋七月庚辰、鄭伯論卒。</p>
襄三 570BC	<p>5b 六月、公會單頃公及諸侯。己未、同盟于雞澤。</p>
襄四 569BC	<p>1 三月、陳成公卒。楚人將伐陳、聞喪乃止。</p> <p>B 冬十月、邾人・莒人伐鄆。</p>
襄五 568BC	<p>7 九月丙午、盟于戚、會吳、且命戍陳也。</p> <p>10 冬、諸侯戍陳。子囊伐陳。十一月甲午、會于城棣以救之。</p>
襄六 567BC	<p>8 十一月、齊侯滅萊。萊恃謀也。於鄭子國之來聘也、四月、晏弱城東陽、而遂圍萊。甲寅、堙之環城、傅於堞。及杞桓公卒之月、乙未、王湫帥師及正輿子・棠人軍齊師。齊師大敗之。丁未、入萊。萊共公浮柔奔棠。正輿子・王湫奔莒、莒人殺之。四月、陳無宇獻萊宗器于襄公。晏弱圍棠、十一月丙辰、而滅之、遷萊于郕。高厚・崔杼、定其田。</p>
襄七 566BC	<p>2 夏四月、三卜郊、不從、乃免牲。</p> <p>A 冬十月、晉韓獻子告老。…庚戌*44、使宣子朝、遂老。</p>

\*43 襄元經2は1「元年春王正月」と3「夏」の間にある。傳2「春己亥」につき杜預傳注は「下有二月、則此己亥爲正月。正月無己亥36、日誤」とする。長曆によれば正月庚戌47朔でたとえば乙亥12は正月に入るが、問題は月を缺くことである。あるいは本来「二月己亥」であったところ、「己亥」のみが挿入され、(同様の事例：僖二十八傳15・18、僖三十二傳4)ついでその後に「二月、齊太子光爲質於晉」の一節が置かれたものかもしれない。

\*44 襄七傳A「冬十月…庚戌47」が傳5・7の間に置かれるのは、經5「秋」・7「冬十月…壬戌59」を参照したために相違ないが、傳7は月日をもたない。上述の隠八傳Cの場合と同様、傳が参照した月日を選択的にしか存置していないことの例證となる。

<p>襄八 565BC</p>	<p>A 鄭群公子以僖公之死也、謀子駟。子駟先之。夏四月庚辰、辭殺子狐・子熙・子侯・子丁。孫擊・孫惡出奔衛。</p> <p>3 庚寅、鄭子國・子耳侵蔡、…</p> <p>4 五月甲辰、會于邢丘、…</p> <p>7 秋九月、大雩、旱也。</p>
<p>襄九 564BC</p>	<p>5 冬十月、諸侯伐鄭。庚午、季武子・齊崔杼・宋皇郈從荀偃・士匄門于鄆門。衛北宮括・曹人・邾人從荀偃・韓起門于師之梁。滕人・薛人從欒黶・士魴門于北門。杞人・邠人從趙武・魏絳斬行栗。甲戌、師于汜、…</p> <p>6 十一月己亥<sup>*45</sup>、同盟于戲、鄭服也。…十二月癸亥、門其三門。閏月<sup>*46</sup>、戊寅、濟于陰阪、侵鄭。次于陰口而還。</p>
<p>襄十 563BC</p>	<p>1 十年春、會于柎、會吳子壽夢也。三月癸丑、齊高厚相大子光、以先會諸侯于鍾離、…夏四月戊午、會于柎。</p> <p>2 丙寅、圍之、弗克。…五月庚寅、荀偃・士匄帥卒攻偃陽、親受矢石、甲午、滅之。</p> <p>4 六月、楚子囊・鄭子耳伐宋、師于訾母。庚午、圍宋、門于桐門。</p> <p>B 秋七月、楚子囊・鄭子耳伐我西鄙。還、圍蕭、八月丙寅、克之。九月、子耳侵宋北鄙。</p> <p>7 諸侯伐鄭。齊崔杼使大子光先至于師、故長於滕。己酉、師于牛首。</p> <p>8 冬十月戊辰、尉止・司臣・侯晉・堵女父・子師僕帥賊以入、晨攻執政于西宮之朝、殺子駟・子國・子耳、劫鄭伯以如北宮。子孔知之、故不死。</p> <p>9 楚子囊救鄭。十一月、諸侯之師還鄭而南、…己亥、與楚師夾潁而軍。…丁未、諸侯之師還、…</p>
<p>襄十一 562BC</p>	<p>1 十一年春、季武子將作三軍、…正月、作三軍、…</p>

\*45 襄九傳6「十一月己亥」を經6は「十有二月己亥」に作る。杜預經注は經の誤とする。

\*46 襄九傳6「閏月」を杜預傳注は、「門五日」の誤とする。

	<p>4 四月、諸侯伐鄭。己亥、齊太子光・宋向戌先至于鄭、…六月、諸侯會于北林、…</p> <p>5 秋七月、同盟于亳。</p> <p>7 楚子囊乞旅于秦。右大夫詹帥師從楚子、將以伐鄭。鄭伯逆之、伐宋。</p> <p>8a 九月、諸侯悉師以復伐鄭。</p> <p>8b 甲戌、晉趙武入盟鄭伯。冬十月丁亥、鄭子展出盟晉侯。十二月戊寅<sup>*47</sup>、會于蕭魚。庚辰、赦鄭囚、…</p> <p>11 秦庶長鮑・庶長武帥師伐晉以救鄭。…壬午、武濟自輔氏、與鮑交伐晉師。己丑、秦・晉戰于櫟、晉師敗績、易秦故也。</p>
襄十四 559BC	4 四月己未 <sup>*48</sup> 、子展奔齊。公如鄆。
襄十五 558BC	B 三月、公孫黑爲質焉。 D 十二月、鄭人奪堵狗之妻、而歸諸范氏。
襄十六 557BC	8 夏六月、次于棫林。庚寅、伐許、次于函氏。
襄十七 556BC	6 十一月甲午 <sup>*49</sup> 、國人逐瘦狗。瘦狗入於華臣氏、國人從之。華臣懼、遂奔陳。
襄十八 555BC	4 冬十月、會于魯濟、尋溴梁之言、同伐齊。…丙寅晦、齊師夜遁。…十一月丁卯朔、入平陰、…己卯、荀偃・士匄以中軍克京茲。乙酉、魏絳・欒盈以下軍克郭。趙武・韓起以上軍圍廬、弗克。十二月戊戌、及秦周伐雍門之萩。…己亥、焚雍門及西郭・南郭。…壬寅、焚東郭・

\*47 襄十一傳 8a は伐鄭を「九月」、8b は蕭魚の會を「十二月戊寅」に繋げる。一方、經 8 は「公會晉侯・宋公・衛侯・曹伯・齊世子光・莒子・邾子・滕子・薛伯・杞伯・小邾子伐鄭。會于蕭魚」を一章とし、經 11 に「冬」が見える。經 8 は蕭魚の會を伐鄭と一連の事件として一章にまとめているのであり、經の記述が完全な時系列順ではないことを示している。杜預傳注が蕭魚の會の傳に「經書秋、史失之」とするのは当たらない。

\*48 襄十四經 3 「夏四月」を傳 3 は「夏」とする。『原左傳』の段階で省略されたものである。傳 4 「四月己未」で四月が初見するのは、傳の編纂の際に『原左傳』のみが参照されたことを示唆する。

\*49 襄十七傳 6 が十一月甲午に繋げる華臣出奔を經 6 は九月に繋げる。傳は建戌正月に従う。

	北郭、…
襄十九 554BC	<p>A 荀偃瘳疽、…二月甲寅、卒、…</p> <p>8 夏五月壬辰晦<sup>*50</sup>、齊靈公卒。</p> <p>C 於四月丁未、鄭公孫董卒、赴於晉大夫。范宣子言於晉侯、以其善於伐秦也。六月、晉侯請於王、王追賜之大路、使以行、禮也。</p> <p>11 秋八月、齊崔杼殺高厚於灑藍、…</p> <p>12 甲辰、子展・子西率國人伐之、殺子孔而分其室。</p> <p>D 齊慶封圍高唐弗克、冬十一月、齊侯圍之、…</p>

成十四 5「九月」・成十七 10「壬申」・成十八 8「八月」は經の章頭にあったため存置されたものである。

成十六 2「夏四月、滕文公卒」の「四月」は、成十六 6「戊寅」に繋がる。鄆陵の戦の起点を記すものであり、そのため「滕文公卒」の前の「四月」が存置されたのである。「滕文公卒」の重視を示すものではない。

襄元經傳を対照すると以下の如くだが、傳6「九月、邾子來朝、禮也」は、7「冬、衛子叔・晉知武子來聘、禮也」と一對で下線部の言説を導く。「九月」は7と形式を統一すべく置かれたものである。

* 5 九月辛酉、天王崩。	
6 邾子來朝。	6 九月、邾子來朝、禮也。
7 冬、衛侯使公孫剽來聘。晉侯使荀偃來聘。	7 冬、衛子叔・晉知武子來聘、禮也。
	<u>凡諸侯即位、小國朝之、大國聘焉、以繼好結信、謀事補闕、禮之大者也。</u>

襄二 4「秋七月庚辰、鄭伯論卒」が紀日まで置くのは、經「六月庚辰、鄭伯論卒」との矛盾のためであろう。「鄭成公卒」といった傳の通常の書法から外れており、經の原

\*50 襄十九傳8が五月壬辰晦に繋げる齊靈公卒を経8は七月辛卯とする。長曆によればそれぞれ「五月二十九日」「七月二十九日」となる。襄十九經は建亥正月、五月壬辰晦は建丑正月、經は、五月晦で伝えられたものを七月晦に換算したものであろう。

資料ないしそれに類似した材料本来の表現を維持するものであろう。杜預は「經誤」とする。經が鄭曆を換算した際に錯誤したものであろう。

月日自体に意味が付与され存置された事例としては、襄七2「夏四月、三卜郊、不從、乃免牲」・襄八7「秋九月、大雩、旱也」がある。「郊」とともに「雩」も、桓五7に  
秋、大雩。書、不時也。凡祀、啟蟄而郊、龍見而雩、始殺而嘗、閉蟄而烝。過則書。  
とあるように、「時」が問題となるので、傳がこれを引く場合は、經の時月が基本的に保存される。

【晉】中期後半はいわゆる「晉悼復霸」が達成される時期である。前半に引き續き、晉關係の記事が壓倒的に多い。傳の月日数が前570～前560年代に經を上まわるのは、とりわけ晉の軍事行動につき月日が詳細化されているからである。

まず晉は鞏の戦で齊を降し（成二3・4）、その歸途、晉の軍帥は衛穆公の卒を弔問している（成二6）。成三12は魯への聘、成三B六軍設置は鞏の戦の論功行賞である。

鄭の許への出兵（成四9）を契機に晉楚對立が再燃する。鄭は晉の同盟に復歸し（成五B）、これを確認する蟲牢の盟への不参加を理由に晉は宋に出兵する（成六4）。ついで楚の鄭侵攻に對し、馬陵に同盟國を集めて鄭を救援する（成七5）。ところが、鄭成公が楚に接近したため、これを抑留し、鄭に出兵、講和ののち、成公を返還する（成十3）。晉景公が卒し（成十5）、魯成公が弔問すると、晉は楚への接近を責めて成公を抑留し、盟ののち歸國させる（成十一1）。これら同盟國との關係強化に並行して、晉はすでに楚との交渉を進め（成九C）、第一次宋の盟が締結される（成十二2・A）。楚との講和を達成した晉は、王朝を奉じ同盟國を率いて秦に遠征する（成十三2a・3）。

晉は楚を牽制すべく吳に接近した。成十五8には「始通吳也」とある。

鄭の楚への接近を契機に、鄆陵の戦が起こり、晉は楚・鄭を破る（成十六6）。以後、晉は鄭への出兵（成十六10・成十七1・8）、同盟の更新（成十七3）を續ける。

中期後半は晉の世族が「六卿」にまで淘汰される時期でもある。晉の内政について、成六Bは新田遷都、成八6は趙同・趙括誅殺、成十七Aは士燮（范宣子）の死である。成十七13は郤氏誅滅、襄七Aは韓獻子（韓厥）の老と宣子（韓起）の立である。

欒書・中行偃は郤氏を誅滅した厲公を弑殺して悼公を擁立する（成十七D・成十八2・A）。宋共公卒後の内紛で宋の魚石らが楚に出奔したが（成十五5・7）、楚・鄭は宋の

彭城に魚石らを納れた。晉は宋を救援して彭城を降し（成十八5・B・11・13・襄元2）、ついで鄭へ出兵し（襄元3）、鄭は晉の同盟に復歸する。ついで雞澤の盟（襄三5b）に陳が参加したことから、楚が陳に出兵する（襄四1）。晉は戚の盟において吳と會し（襄五7）、ついで陳を救援する（襄五10）。邢丘の盟（襄八4）ののち鄭が楚に降ると、晉は鄭を攻め（襄九5）、戲の盟を結ぶが、ふたたび開戦する（襄九6）。

襄十1・2は祖の會とそれに續く偃陽攻略である。

十年春、會于祖、會吳子壽夢也。三月癸丑、齊高厚相大子光、以先會諸侯于鍾離、不敬。士莊子曰、高子相大子以會諸侯、將社稷是衛、而皆不敬、棄社稷也。其將不免乎。夏四月戊午、會于祖。

冒頭の「十年春、會于祖、會吳子壽夢也、」の下線部は經「十年春、公會晉侯・宋公・衛侯・曹伯・莒子・邾子・滕子・薛伯・杞伯・小邾子・齊世子光、會吳于祖」の省略であり、これに「會吳子壽夢也」が續く。「××也」の典型的な解經形式であり、『原左傳』に由来するものである。「三月癸丑」以下は獨自資料であり、傳は兩者をまとめていない。杜預は經の「春」を「會吳于祖」まで繋かるとみなした上で、傳に「夏四月戊午、會于祖」とあることにつき、「經書春、書始行」と説明するが、『會箋』は「吳子始來、故晉侯先會而成言、帥諸侯以會吳子于祖也」と解する。すなわち經の「春、公會晉侯・…」は傳に「三月癸丑、…以先會于鍾離」と見える鍾離の會であるとする。従うべきであろう。この場合、經の「春」は「會吳于祖」には繋からないことになる。經が一定期間にわたる事件を記す場合、章の冒頭に置かれる時月日は、ある場合には事件の最初の部分にしか繋からないということである。

ついで、楚・鄭の宋・魯への侵攻（襄十4・B）に對し、晉が出兵して（襄十一4）、亳の盟を結ぶが（襄十一5）、鄭は楚・秦の侵攻に屈してともに宋に出兵し（襄十一7）、晉がふたたび出兵（襄十一8a）、蕭魚の會（襄十一8b）により、鄭の同盟復歸は確定する。この間、秦が鄭を救援すべく出兵し、櫟で晉を破っている（襄十一11）。鄭をめぐる晉楚對立は晉の勝利に終わり、「晉悼復霸」はここに完成する。

前550年代の月日の数が前560年代より少ないのは、「晉悼復霸」達成の結果、月日の詳細化に對する傳の志向が減退したためであろう。晉は櫟の戦の報復として、前559年に秦に出兵しているが、襄十四經3の「夏四月」を傳は「夏」と省略している。つ



いで、晉悼公の卒につき、襄十五經8「冬十一月癸亥」を傳7・8

秋、邾人伐我南鄙。使告于晉。晉將爲會以討邾・莒。晉侯有疾、乃止。冬、晉悼公卒。遂不克會。鄭公孫夏如晉奔喪、子驥送葬。

は「冬」と省略し、そもそも悼公卒を「不克會」の原因としてしか記述していない。

平公が立つと溴梁の會において邾宣公・莒犁比公を抑留、齊の卿・高厚を非難し、許に出兵する（襄十六8）。ついで齊に出兵し（襄十八4）、その歸途、荀偃が卒する（襄十九A）。

【楚】月日をもつ記事としては、まずは、成二9蜀の盟、成九11莒の攻略がある。それ以降については上掲の晉との對戦に類見するが、楚人の側に立ち入った記述は乏しい。

【鄭】中期前半には、晉に關係するを除けば月日をもつ章が見えないが、後半では、晉の霸權再建が鄭の奪回を最大の目標としていたため、鄭の登場する章が多い。晉のところで言及したように、鄭の許への侵攻（成四9）、楚が許を支持し、鄭が晉の同盟に復歸したこと（成五B）が、晉楚對立を再燃させた。悼公が卒した（成六7）のち、楚が鄭に侵攻すると、晉は馬陵に盟し、鄭を救援した（成七5）。鄭成公は楚に接近したため晉に抑留され、これに對抗すべく公子班が公子緇を擁立したことが内紛を惹起する（成十3・B・成十三A）。鄭は晉の同盟に復歸した（成十3）のち、許にふたたび侵攻する（成十四4）。鄭が同盟に離反したことから鄆陵の戦が起こり（成十六6）、ついで鄭は同盟に復歸する。鄭の正卿・子駟は、僖公弑殺ののち群公子を肅清し（襄八A）、ついで鄭は蔡に侵攻する（襄八3）が、楚の侵攻を受けてこれに降り、以後、蕭魚の會（襄十一8b）に至るまで、晉・楚との同盟・離反を反復する。この間、子駟が暗殺されたが（襄十8）、暗殺犯はのちに處斷された（襄十五B・D）。その後も、公孫董の卒（襄十九C）、子孔殺害（襄十九12）など世族の動向に關わる章が類見する。

【魯】成六2は季文子が臺の戦を記念して武宮を立てたことを記す。成九4は伯姬が宋に嫁いだことを記すが、伯姬は降って襄三十3宋の災で卒する。成三12は來聘した晉の荀庚・衛の孫良夫の序列に關わる。成十六12・13・14は、叔孫僑如が季氏・孟氏の追放を晉の郤犇に謀り、季文子を抑留させたものの、結局自らが追放された顛末を記す。成十八10・14は魯成公の薨・葬。襄四B

冬十月、邾人・莒人伐鄆。臧紇救鄆、侵邾、敗于狐駘。國人逆喪者皆鬻。魯於是乎始鬻。…

につき注目されるのは、この事件が、『禮記』檀弓「魯婦人之鬻而弔也、自敗於臺鮒始也」に言及されていることである。檀弓は『左傳』の一つの原資料であり<sup>\*51</sup>、傳に先行する有名な事件に關わるものとして、とくに紀月が存置された可能性がある。

【周】成五6は定王崩。經傳を対照すると以下の如くだが、

<p>* 5 秋、大水。</p> <p>6 冬十有一月己酉、天王崩。</p> <p>7 十有二月己丑、公會晉侯・齊侯・宋公・衛侯・鄭伯・曹伯・邾子・杞伯同盟于蟲牢。</p>	<p>B…秋八月、鄭伯及晉趙同盟于垂棘。</p> <p>C 宋公子圍龜爲質于楚而歸、華元享之。請鼓譟以出、鼓譟以復入。曰、習攻華氏。宋公殺之。</p> <p>7 冬、同盟于蟲牢。鄭服也。諸侯謀復會、宋公使向爲人辭以子靈之難。</p> <p>6 十一月己酉、定王崩。</p>
--	--

傳は經6・7を轉倒しており、杜預は「經在蟲牢盟上、傳在下、月倒錯。眾家傳悉無此八字、或衍文」と衍文の可能性を主張する。對するに『會箋』は、

- (1) 經に定王の葬がないため、その諡號を示すために記したもので衍文ではない。
- (2) 7 蟲牢の盟はC 公子圍龜（子靈）殺害と一連の事件となるので、C の後にただちに7を置いた。

と主張する<sup>\*52</sup>。傳が記述の連続性を優先して經とは異なった章次を採ることは往々にしてある。また、定王の諡號を示すためという説明も一應は了解できる。しかしそれで

\*51 吉本1992。

\*52 『會箋』成六「定王不書葬、故傳欲見王諡記之也。決非衍文。先言蟲牢盟及謀復會者、因上文記子靈之事、而終言之。非隨經次而正釋之、故直言冬、以明宋公殺子靈在秋、而不言十二月。傳文本自明白、杜不曉傳終言之例何也」。

も6が月日を保存したことの説明にはならない。そもそも、傳は周王・諸侯の崩卒について一貫した書法を缺き、周王についてはそれがとりわけ甚だしい\*53。確かに定王は、晉楚對立の過程で再々登場しており、そのことが傳の定王への關心を高め、定王崩に月日を存置したという説明も不可能ではないが、むしろ、傳の記述の不安定さによるものと考えた方が無理が無い。

【齊】成十七5・C・成十八3は齊の内紛であり、崔杼が卿に任ぜられている。以後、世族の盛衰に關わる記述が豊富になる。襄六8

十一月、齊侯滅萊。萊恃謀也。於鄭子國之來聘也、四月、晏弱城東陽、而遂圍萊。甲寅、堙之環城、傳於堞。及杞桓公卒之月、乙未、王湫帥師及正輿子・棠人軍齊師。齊師大敗之。丁未、入萊。萊共公浮柔奔棠。正輿子・王湫奔莒、莒人殺之。四月、陳無宇獻萊宗器于襄公。晏弱圍棠、十一月丙辰、而滅之、遷萊于郕。高厚・崔杼、定其田。

は萊の征服。冒頭の「十一月、齊侯滅萊、萊恃謀也」は『原左傳』に由來する部分であろうが、經は「十有二月、齊侯滅萊」に作る。「於鄭子國之來聘」以下は獨自資料に基づく部分だが、そこの「十一月丙辰、而滅之」に従って、十二月を十一月に改めたものであろう。長曆によれば十一月は丁丑朔で丙辰はなく、魯曆の建子正月に對し、「十一月丙辰」は建丑正月に従うことを知る。鄭の子國の來聘は、襄五2「夏、鄭子國來聘、通嗣君也」に見え、「杞桓公卒之月」は、襄六1經「六年春王三月壬午、杞伯姑容卒」によれば同年三月である。經の紀時・紀月を獨自資料に挿入しているのであり、傳が獨自資料を採録する過程を彷彿させる。

\*53 周王の崩についての傳の記述は以下の如くである。(1)平王：隱三傳2「三年春王三月壬戌、平王崩。赴以庚戌、故書之」。(2)桓王：桓十五經2は無傳。(3)莊王：崩は經傳ともに見えない。(4)釐王：釐王は經傳ともに見えない。(5)惠王：僖七傳A「閏月、惠王崩」。經は翌年に繋げる。僖八經4「冬十有二月丁未、天王崩。」傳「冬、王人來告喪。難故也、是以緩」。(6)襄王：文八傳3「秋、襄王崩」。(7)頃王：崩は經に見えず、文十四傳Aに「十四年春、頃王崩。周公閱與王孫蘇爭政、故不赴。凡崩・薨、不赴、則不書。禍・福、不告、亦不書。不懲敬也」とある。(8)匡王：宣二經5は無傳。(9)定王：成五「十一月己酉、定王崩」。(10)簡王：襄元經5は無傳。(11)靈王：襄二十八傳D「(十一月)癸巳、天王崩」。經8「十有二月甲寅、天王崩」傳「王人來告喪。問崩日、以甲寅告、故書之、以徵過也」。(12)景王：昭二十二傳4「(四月)王有心疾、乙丑、崩于榮錡氏」。(13)敬王：哀十九傳C「冬、叔青如京師、敬王崩故也」。傳のみならず經においても記述が不安定であることが了解されよう。

襄十九 8・11・D は齊靈公卒、莊公即位にともなう内紛である。

【宋】成二 5 宋文公卒は文十八 A 文公立に呼應する。成十五 5 宋共公卒を契機に魚石が楚に出奔し(成十五 7)、彭城をめぐる晉楚對立を惹起したことは上述の如くである(成十八 5・B・11・13・襄元 2)。襄十七 6 は華臣の出奔。

【衛】成二 6 は衛穆公卒。成十四 6 は定公卒、獻公立であり、孫林父の亂を豫言する。襄十四 4 は孫林父・甯殖の獻公追放。

### 第五節 後期前半

晉の欒氏が出奔する襄公二十一年 552BC から召陵の盟の開かれた定公四年 506BC まで 47 年間。

襄二十二 551BC	D 九月、鄭公孫黑肱有疾、…己巳、伯張卒。 E 十二月、鄭游販將歸晉、未出竟、遭逆妻者、奪之、以館于邑。 丁巳*54、其夫攻子明殺之、…
襄二十三 550BC	6 四月、欒盈帥曲沃之甲、因魏獻子以晝入絳。 8 八月、叔孫豹帥師救晉、次于雍榆、禮也。 9 己卯、孟孫卒、… 10 冬十月、孟氏將辟、藉除於臧氏。…乙亥、臧紇斬鹿門之關以出、奔邾。
襄二十四 549BC	A 范宣子爲政、諸侯之幣重、鄭人病之。二月、鄭伯如晉、…
襄二十五 548BC	2 夏五月、莒子爲且于之役故、莒子朝于齊。甲戌、饗諸北郭。… 乙亥、公問崔子、…叔孫還納其女於靈公。嬖、生景公。丁丑、崔杼立而相之、…辛巳、公與大夫及莒子盟。…丁亥、葬諸士孫之里、… 4 六月、鄭子展・子產帥車七百乘伐陳、… 5 秋七月己巳、同盟于重丘、齊成故也。

\*54 長曆は「十二月無丁巳」とする。

	<p>8 八月、楚滅舒鳩。</p> <p>9 冬十月、子展相鄭伯如晉、拜陳之功。</p> <p>C 楚蒍掩爲司馬、子木使庀賦、數甲兵。甲午、蒍掩書土田、…</p> <p>10 十二月、吳子諸樊伐楚、…</p> <p>G 會于夷儀之歲、齊人城郟*55。其五月、秦・晉爲成。晉韓起如秦涖盟、秦伯車如晉涖盟、成而不結。</p>
<p>襄二十六 547BC</p>	<p>1 二月庚寅、甯喜・右宰穀伐孫氏、…辛卯、殺子叔及大子角。</p> <p>3 甲午、衛侯入。</p> <p>C 鄭伯賞入陳之功。三月甲寅朔、享子展、…</p> <p>D 五月、至于城麋。鄭皇頡戍之。出、與楚師戰、敗。</p> <p>5 六月、公會晉趙武・宋向戌・鄭良霄・曹人于澶淵以討衛、疆戚田。</p> <p>7 秋七月、齊侯・鄭伯爲衛侯故如晉、…</p> <p>8 許靈公如楚、請伐鄭、曰、師不興、孤不歸矣。八月、卒于楚。</p> <p>9 冬十月、楚子伐鄭。…十二月乙酉、入南里、墮其城。</p>
<p>襄二十七 546BC</p>	<p>2 五月甲辰、晉趙武至於宋。丙午、鄭良霄至。六月丁未朔、宋人享趙文子、…戊申、叔孫豹・齊慶封・陳須無・衛石惡至。甲寅、晉荀盈從趙武至。丙辰、邾悼公至。壬戌、楚公子黑肱先至、成言於晉。丁卯、宋向戌如陳、從子木成言於楚。戊辰、滕成公至。…庚午、向戌復於趙孟。…、壬申、左師復言於子木。</p> <p>5 秋七月戊寅、左師至。是夜也、趙孟及子皙盟、以齊言。庚辰*56、子木至自陳。陳孔奐・蔡公孫歸生至。曹・許之大夫皆至。…辛巳、將盟於宋西門之外。…壬午、宋公兼享晉・楚之大夫、…乙酉、宋公及諸侯之大夫盟于蒙門之外。</p>

\*55 襄二十五傳 G 「會于夷儀之歲、齊人城郟」の「會于夷儀」は、襄二十四傳 8、「齊人城郟」は襄二十四傳 12 に見える。獨自資料を傳に取り込む過程を彷彿させる。

\*56 襄二十七經 2 に「夏、叔孫豹會晉趙武・楚屈建・蔡公孫歸生・衛石惡・陳孔奐・鄭良霄・許人・曹人于宋」とあるが、傳 2 は屈建の宋への到着を七月庚辰とする。正義は「諸侯大夫七月始集於宋、而此會書在夏者、事雖在秋、行還乃告。追以叔孫豹發時書之」と説明する。

	<p>D 九月庚辰、崔成・崔彊殺東郭偃・棠无咎於崔氏之朝。…辛巳、崔明來奔。</p> <p>6 十一月乙亥朔<sup>*57</sup>、日有食之。</p>
襄二十八 545BC	<p>4 秋八月、大雩、旱也。</p> <p>6 冬十月、慶封田于萊、陳無宇從。丙辰、文子使召之。…十一月乙亥、嘗于大公之廟、…丁亥、伐西門、…</p> <p>D 癸巳、天王崩。</p> <p>E 十二月乙亥朔<sup>*58</sup>、齊人選莊公、殯于大寢。</p>
襄二十九 544BC	<p>1 二十九年春王正月、公在楚、…</p> <p>A 二月癸卯、齊人葬莊公於北郭。</p> <p>B 夏四月、葬楚康王。</p> <p>2 五月、公至自楚。</p> <p>5 六月、知悼子合諸侯之大夫以城杞、…</p> <p>10 秋九月、齊公孫蠆・公孫竈放其大夫高止於北燕。乙未、出。</p> <p>E 十月庚寅、閭丘嬰帥師圍廬。…十一月乙卯、高豎致廬而出奔晉。</p> <p>F 十二月己巳、鄭大夫盟於伯有氏。</p>
襄三十 543BC	<p>1 三十年春王正月、楚子使薳罷來聘、…</p> <p>B 二月癸未、晉悼夫人食輿人之城杞者。</p> <p>C 夏四月己亥<sup>*59</sup>、鄭伯及其大夫盟。</p> <p>4 戊子、僖括圍蕩、逐成愆。成愆奔平時。五月癸巳、尹言多・劉穀・單蔑・甘過・鞏成殺佞夫。括・瑕・廖奔晉。</p> <p>3 甲午、宋大災。宋伯姬卒、…</p> <p>D 六月、鄭子產如陳洧盟。</p>

\*57 襄二十七傳6「十一月乙亥」を經6は「十有二月乙卯朔」（『長曆』は乙亥朔）に作り、杜預經注は「經誤」とする。

\*58 襄二十八傳E「十二月乙亥朔」は、杜預傳注が「誤」と指摘するように、「己亥」の誤寫である。

\*59 襄三十傳C「四月己亥」を長曆は「乙亥」に作る。己亥は乙亥の誤寫であろう。

	<p>5 秋七月、叔弓如宋、葬共姬也。</p> <p>6 庚子、子皙以駟氏之甲伐而焚之。伯有奔雍梁、醒而後知之、遂奔許。…辛丑、子產斂伯有氏之死者而殯之、…壬寅、子產入。癸卯、子石入。皆受盟于子皙氏。乙巳、鄭伯及其大夫盟于大宮。盟國人于師之梁之外。…癸丑、晨、自墓門之瀆入、…八月甲子、奔晉。…己巳、復歸。</p> <p>8 爲宋災故、諸侯之大夫會、以謀歸宋財。冬十月、叔孫豹會晉趙武・齊公孫董・宋向戌・衛北宮佗・鄭罕虎及小邾之大夫、會于澶淵。</p>
<p>襄三十一 542BC</p>	<p>A 三十一年春王正月、穆叔至自會。</p> <p>B 夏五月、子尾殺閭丘嬰、以說于我師。</p> <p>2 六月辛巳、公薨于楚宮。</p> <p>3 立胡女敬歸之子子野、次于季氏。秋九月癸巳、卒、毀也。</p> <p>4 己亥、孟孝伯卒。</p> <p>5 冬十月、滕成公來會葬、…癸酉、葬襄公。</p> <p>D 公薨之月、子產相鄭伯以如晉、…</p> <p>6 十一月、展輿因國人以攻莒子、弑之、乃立。</p> <p>G 十二月、北宮文子相衛襄公以如楚、…</p>
<p>昭元 541BC</p>	<p>2 元年春、楚公子圍聘于鄭、…正月乙未、入逆而出、遂會於虢。…三月甲辰、盟。</p> <p>B 夏四月、趙孟・叔孫豹・曹大夫入于鄭、鄭伯兼享之。</p> <p>E 五月庚辰、鄭放游楚於吳。</p> <p>4 癸卯、鍼適晉、…</p> <p>F 鄭爲游楚亂故、六月丁巳、鄭伯及其大夫盟于公孫段氏。</p> <p>10 十一月己酉、公子圍至、入問王疾、縊而弑之。</p> <p>I 十二月、晉既烝、趙孟適南陽將會孟子餘、甲辰朔、烝于溫、庚戌、卒。</p>
<p>昭二 540BC</p>	<p>A 夏四月、韓須如齊逆女。</p> <p>3 秋、鄭公孫黑將作亂、…七月壬寅、縊。</p> <p>4 冬、十月、陳無宇歸。十一月、鄭印段如晉弔。</p>

昭三 539BC	<p>A 三年春王正月、鄭游吉如晉、…</p> <p>1 丁未、滕子原卒。同盟、故書名。</p> <p>D 夏四月、鄭伯如晉、…</p> <p>2 五月、叔弓如滕、葬滕成公。</p> <p>F 秋七月、鄭罕虎如晉、賀夫人、…</p> <p>4 八月、大雩、旱也。</p> <p>G 九月、子雅放盧蒲癸于北燕。</p> <p>H 十月、鄭伯如楚、…</p>
昭四 538BC	<p>A 四年春王正月、許男如楚、楚子止之、遂止鄭伯、復田江南、…</p> <p>2 六月丙午、楚子合諸侯于申。</p> <p>3 秋七月、楚子以諸侯伐吳。…八月甲申*<sup>60</sup>、克之。執齊慶封而盡滅其族。</p> <p>4 九月、取鄆、言易也。莒亂、著丘公立而不撫鄆、鄆叛而來、故曰取。</p> <p>5 十二月癸丑、叔孫不食。乙卯、卒。</p>
昭五 537BC	<p>1 五年春王正月、舍中軍、卑公室也。</p> <p>5 秋七月、公至自晉。</p> <p>6 莒人來討、不設備。戊辰、叔弓敗諸蚡泉、莒未陳也。</p> <p>8 冬十月、楚子以諸侯及東夷伐吳、…</p>
昭六 536BC	<p>1 六年春王正月、杞文公卒、弔如同盟、禮也。</p> <p>2 三月、鄭人鑄刑書。</p> <p>B 六月丙戌、鄭災。</p> <p>6 秋九月、大雩、旱也。</p> <p>9 十一月、齊侯如晉、…十二月、齊侯遂伐北燕、將納簡公。</p>
昭七 535BC	<p>1 七年春王正月、暨齊平、齊求之也。癸巳、齊侯次于號。燕人行成、…二月戊午、盟于濡上。</p> <p>2 三月、公如楚、…</p>

\*60 長曆「八月無甲申、七月二十六日也。上有七月、下有九月、則誤在日也。」



	<p>4 夏四月甲辰朔、日有食之。</p> <p>F 鑄刑書之歲二月、或夢伯有介而行、曰、壬子、余將殺帶也。明年壬寅、余又將殺段也。及壬子、駟帶卒。國人益懼。齊・燕平之月、壬寅、公孫段卒、…</p> <p>5 秋八月、衛襄公卒。</p> <p>6 九月、公至自楚。</p> <p>H 單獻公棄親用羈。冬十月辛酉、襄・頃之族殺獻公而立成公。</p> <p>7 十一月、季武子卒。</p> <p>8 十二月癸亥、葬衛襄公。</p>
昭八 534BC	<p>1 三月甲申、公子招・公子過殺悼太子偃師、而立公子留。</p> <p>2 夏四月辛亥*<sup>61</sup>、哀公縊。</p> <p>B 七月甲戌、齊子尾卒、子旗欲治其室。丁丑、殺梁嬰。八月庚戌、逐子成・子工・子車。皆來奔、…</p> <p>9 九月、楚公子棄疾帥師奉孫吳圍陳、…冬十一月壬午*<sup>62</sup>、滅陳。</p>
昭九 533BC	<p>2 二月庚申、楚公子棄疾遷許于夷、…</p> <p>3 夏四月、陳災。</p> <p>B 晉荀盈如齊逆女、還、六月、卒于戲陽。…秋八月、使荀躒佐下軍以說焉。</p>
昭十 532BC	<p>A 十年春王正月、有星出于婺女。鄭裨竈言於子產曰、…</p> <p>2 齊惠樂・高氏皆著酒、…五月庚辰*<sup>63</sup>、戰于稷、樂高敗、…</p> <p>3 秋七月、平子伐莒、取鄆、…</p> <p>4 戊子、晉平公卒。</p> <p>5 九月、叔孫婁・齊國弱・宋華定・衛北宮喜・鄭罕虎・許人・曹人・</p>

\*61 昭八傳2「夏四月辛亥」を經2は「夏四月辛丑」に作る。杜預傳注は「從赴」とするが、むしろ經の誤寫であろう。

\*62 昭八傳9「冬十一月壬午」を經9は「冬十月壬午」に作り、杜預傳注は「傳言十一月者誤也」とするが、傳は建亥正月に従うものであろう。

\*63 長曆「五月無庚辰、四月二十五日也。日月必有誤也」。

	莒人・邾人・薛人・杞人・小邾人如晉、葬平公也。 6 冬十二月、宋平公卒。
昭十一 531BC	1 十一年春王二月、叔弓如宋、… 3 三月丙申、楚子伏甲而饗蔡侯於申、醉而執之。夏四月丁巳、殺之、刑其士七十人。 5 五月、齊歸薨、… 9 九月、葬齊歸、… 10 冬十一月、楚子滅蔡、… B 十二月、單成公卒。
昭十二 530BC	2 三月、鄭簡公卒、… 5 六月*64、葬鄭簡公。 C 荀吳僞會齊師者、假道於鮮虞、遂入昔陽。秋八月壬午、滅肥、以肥子綿皋歸。 D 周原伯絞虐其輿臣、使曹逃。冬十月壬申朔、原輿人逐絞而立公子跪尋、絞奔郊。甘簡公無子、立其弟過。過將去成・景之族。成・景之族賂劉獻公。丙申、殺甘悼公、而立成公之孫鱣。丁酉、殺獻太子之傅庾皮之子過。殺瑕辛于市、及宮嬖綽・王孫沒・劉州鳩・陰忌・老陽子。
昭十三 529BC	2 夏五月癸亥*65、王縊于芋尹申亥氏。 3 乙卯、夜、棄疾使周走而呼曰、…丙辰、棄疾即位、… 4 七月丙寅、治兵于邾南、… 5 八月辛未、治兵、建而不旆。壬申、復旆之。諸侯畏之。…甲戌、同盟于平丘、齊服也。令諸侯日中造于除。癸酉、退朝。 9 冬十月、葬蔡靈公、禮也。
昭十四 528BC	5 秋八月、莒著丘公卒、…

\*64 昭十二傳 5「六月」を經 5は「五月」に作る。傳は建亥正月に従うものであろう。

\*65 昭十三傳 2「夏五月癸亥」を經 2は「四月」に作る。傳は建亥正月に従うものであろう。

	<p>C 九月甲午、楚子殺鬬成然、而滅養氏之族。</p> <p>6 冬十二月、蒲餘侯茲夫殺莒公子意恢、…</p>
昭十五 527BC	<p>2 二月癸酉、禘、叔弓涖事、籥入而卒、去樂卒事、禮也。</p> <p>A 六月乙丑、王太子壽卒。</p> <p>B 秋八月戊寅、王穆后崩。</p> <p>C 十二月、晉荀躒如周葬穆后、…</p>
昭十六 526BC	<p>A 十六年春王正月、公在晉、晉人止公。不書、諱之也。</p> <p>B 二月丙申、齊師至于蒲隧。徐人行成。徐子及邾人・莒人會齊侯、盟于蒲隧。</p> <p>C 三月*66、晉韓起聘于鄭、…夏四月、鄭六卿餞宣子於郊。</p> <p>4 秋八月、晉昭公卒。</p> <p>5 九月、大雩、旱也。</p> <p>6 冬十月、季平子如晉、葬昭公。</p>
昭十七 525BC	<p>2 夏六月甲戌朔、日有食之。</p> <p>4 九月丁卯、晉荀吳帥師涉自棘津、…庚午*67、遂滅陸渾、…</p>
昭十八 524BC	<p>A 十八年春王二月乙卯、周毛得殺毛伯過而代之。</p> <p>1 三月、曹平公卒。</p> <p>2 夏五月、火始昏見。丙子、風。…戊寅、風甚。壬午*68、大甚。宋・衛・陳・鄭皆火。</p> <p>3 六月、邠人藉稻。</p> <p>B 七月、鄭子產爲火故、大爲社、…</p>
昭十九 523BC	<p>B 正月、楚夫人羸氏至自秦。</p> <p>1 邠夫人、宋向戌之女也、故向寧請師。二月、宋公伐邾、圍蟲。三月、取之。乃盡歸邠俘。</p>

\*66 阮元本は「二月」に作るが、『會箋』に従い「三月」とする。

\*67 昭十七傳4「九月」を經4は「八月」に繋げる。傳は建亥正月に従うものであろう。

\*68 昭十八傳2「五月壬午」は經2を引くが、魯曆に載らない。長曆「五月無壬午、四月二十三日也。日月必有誤」。

	<p>2 夏、許悼公瘡。五月戊辰、飲大子止之藥、卒。</p> <p>C 邾人・邾人・徐人會宋公。乙亥、同盟于蟲。</p> <p>4 七月丙子、齊師入紀。</p>
昭二十 522BC	<p>A 二十年春王二月己丑、日南至。梓慎望氛、曰、今茲宋有亂、國幾亡、三年而後弭。蔡有大喪。</p> <p>B 三月、大子建奔宋。</p> <p>C 夏六月丙申、殺公子寅・公子御戎・公子朱・公子固・公孫援・公孫丁、拘向勝・向行於其廩。公如華氏請焉、弗許、遂劫之。癸卯、取大子欒與母弟辰・公子地、以爲質。</p> <p>3 衛公孟縶狎齊豹、…丙辰、衛侯在平壽。…丁巳晦<sup>*69</sup>、公入、與北宮喜盟于彭水之上。秋七月戊午朔、遂盟國人。八月辛亥、公子朝・褚師圃・子玉霄・子高魴出奔晉。閏月戊辰、殺宣姜。</p> <p>4 冬十月、公殺華・向之質而攻之。戊辰、華・向奔陳、華登奔吳。</p> <p>E 十二月、齊侯田于沛、…</p>
昭二十一 521BC	<p>1 三月、葬蔡平公。蔡大子朱失位、位在卑。</p> <p>3 五月丙申、子皮將見司馬而行、…壬寅、華・向入。樂大心・豐愆・華輕禦諸橫。華氏居盧門、以南里叛。六月庚午、宋城舊廡及桑林之門而守之。</p> <p>4 秋七月壬午朔、日有食之。</p> <p>5 八月、叔輒卒。</p> <p>B 冬十月、華登以吳師救華氏。…丙寅、齊師・宋師敗吳師于鴻口、…十一月癸未、公子城以晉師至。曹翰胡會晉荀吳・齊苑何忌・衛公子朝救宋。丙戌、與華氏戰于赭丘。</p>
昭二十二 520BC	<p>1 二十二年春王二月甲子、齊北郭啟帥師伐莒。</p> <p>2 己巳、宋華亥・向寧・華定・華貜・華登・皇奄傷・省臧・士平</p>

\*69 正義「丙辰丁巳乃是類日、其事既多、不應二日之中竝爲此事。今杜不云日誤者、以誤在可知、故杜不言」。

出奔楚、

4 夏四月、王田北山、使公卿皆從、將殺單子・劉子。王有心疾、乙丑、崩于榮錡氏。戊辰、劉子摯卒、無子、單子立劉蚡。五月庚辰、見王、遂攻賓起、殺之。盟群王子于單氏。

A 六月、荀吳略東陽、…

6 丁巳、葬景王。王子朝因舊官・百工之喪職秩者與靈・景之族以作亂。帥郊・要・餞之甲、以逐劉子。壬戌、劉子奔揚。單子逆悼王于莊宮以歸。王子還夜取王以如莊宮。癸亥、單子出。王子還與召莊公謀、曰、不殺單旗、不捷。與之重盟、必來。背盟而克者多矣。從之。樊頃子曰、非言也、必不克。遂奉王以追單子、及領、大盟而復。殺摯荒以說。劉子如劉、單子亡。乙丑、奔于平時。群王子追之、單子殺還・姑・發・弱・饜・延・定・稠、子朝奔京。丙寅、伐之。京人奔山。劉子入于王城。辛未、鞏簡公敗績于京。乙亥、甘平公亦敗焉。

7 秋七月戊寅\*70、以王如平時、遂如圃車、次于皇。劉子如劉。單子使王子處守于王城。盟百工于平宮。辛卯、鄆肸伐皇。大敗、獲鄆肸。壬辰、焚諸王城之市。

8 八月辛酉、司徒醜以王師敗績于前城。百工叛。己巳、伐單氏之宮、敗焉。庚午、反伐之。辛未、伐東園。冬十月丁巳\*71、晉籍談・荀躒帥九州之戎及焦・瑕・溫・原之師、以納王于王城。庚申、單子・劉蚡以王師敗績于郊、前城人敗陸渾于社。

\*70 昭二十二經7「劉子・單子以王猛居于皇」は經5「六月」・8「秋」の間に置かれるが、傳7は「秋七月戊寅」に繋げる。經の魯暦は閏六月を置くため、經の閏六月が傳の七月になったものである。傳9には「十二月」の後に「閏月」があり、傳の暦が閏十二月を置いたことを知るが、杜預傳注は經傳の暦法の相違を認めず、魯暦も閏十二月とし、「經書六月、誤也」とする。傳の暦は魯暦と置閏が異なるだけであり、魯暦が周暦を標榜することを考慮すれば、傳のこの部分は實際の周暦によるものと思われる。

\*71 昭二十二傳8が十月丁巳に繋げる王子猛の王城入城を、經8は秋に繋げる。魯暦九月が周暦十月に当たる。杜預傳注は「經書秋、誤」とする。

	<p>9 十一月乙酉<sup>*72</sup>、王子猛卒。不成喪也。己丑、敬王即位。館于子旅氏。</p> <p>十二月庚戌、晉籍談・荀躒・賈辛・司馬督帥師軍于陰、于侯氏、于谿泉、次于社。王師軍于汜、于解、次于任人。閏月、晉箕遺・樂徵・右行詭濟師取前城、軍其東南。王師軍于京楚。辛丑、伐京、毀其西南。</p>
昭二十三 519BC	<p>4 二十三年春王正月壬寅朔<sup>*73</sup>、二師圍郊。癸卯、郊・鄆潰。丁未、晉師在平陰、王師在澤邑。王使告聞、庚戌、還。</p> <p>8 夏四月乙酉、單子取訾、劉子取牆人・直人。六月壬午、王子朝入于尹。癸未、尹圉誘劉佗殺之。丙戌、單子從阪道、劉子從尹道、伐尹。單子先至而敗、劉子還。己丑、召伯奭・南宮極以成周人戍尹。庚寅、單子・劉子・樊齊以王如劉。甲午、王子朝入于王城、次于左巷。秋七月戊申、鄆羅納諸莊宮。尹辛敗劉師于唐。丙辰、又敗諸鄆。甲子、尹辛取西闈。丙寅、攻蒯、蒯潰。</p> <p>7 戊辰晦、戰于雞父。</p> <p>9 八月丁酉、南宮極震。</p> <p>A 冬十月甲申、吳太子諸樊入郢、取楚夫人與寶器以歸。</p>
昭二十四 518BC	<p>A 二十四年春王正月辛丑、召簡公・南宮嚚以甘桓公見王子朝。…戊午、王子朝入于鄆。</p> <p>2 二月、媯至自晉、尊晉也。</p> <p>B 三月庚戌、晉侯使士景伯泄問周故。</p> <p>3 夏五月乙未朔、日有食之。</p> <p>C 六月壬申、王子朝之師攻瑕及杏、皆潰。</p> <p>4 秋八月、大雩、旱也。</p> <p>5 冬十月癸酉、王子朝用成周之寶珪于河。甲戌、津人得諸河上。</p>

\*72 昭二十二傳9が十一月乙酉に繋げる王子猛卒を経9は十月に繋げる。杜預傳注は「經書十月、誤」とする。

\*73 昭二十三傳4は晉師圍郊を正月壬寅39朔・癸卯40に繋げるが、經4は經2「(正月)癸丑50」の後に置く。杜預經注は、「圍郊、在叔鞅卒前、經書後、從赴」というが、傳は晉曆(建寅正月)によるものであろう。晉曆正月は魯曆三月に當たる。

昭二十五 517BC	<p>5 九月戊戌、伐季氏、…己亥、公孫于齊、…</p> <p>6 冬十月辛酉、昭子齊於其寢、使祝宗祈死。戊辰、卒。</p> <p>A 壬申、尹文公涉于鞏、焚東訾、弗克。</p> <p>7 十一月、宋公元公將爲公故如晉、…宋公遂行。己亥、卒于曲棘。</p> <p>8 十二月庚辰、齊侯圍鄆。</p>
昭二十六 516BC	<p>A 二十六年春王正月庚申、齊侯取鄆。</p> <p>2 三月、公至自齊、處于鄆、言魯地也。</p> <p>B 四月、單子如晉告急。五月戊午、劉人敗王城之師于尸氏。戊辰、王城人・劉人戰于施谷、劉師敗績。</p> <p>C 七月己巳、劉子以王出。庚午、次于渠。王城人焚劉。丙子、王宿于褚氏。丁丑、王次于萑谷。庚辰、王入于胥靡。辛巳、王次于滑。晉知躒・趙鞅帥師納王、使汝寬守關塞。</p> <p>6 九月、楚平王卒。</p> <p>7 冬十月丙申、王起師于滑。辛丑、在郊、遂次于尸。十一月辛酉、晉師克鞏。召伯盈逐王子朝、王子朝及召氏之族・毛氏得・尹氏固・南宮嚚奉周之典籍以奔楚。陰忌奔莒以叛。召伯逆王于尸、及劉子・單子盟。遂軍圍澤、次于隄上。癸酉<sup>*74</sup>、王入于成周。甲戌、盟于襄宮。晉師成公般戍周而還。十二月癸未、王入于莊宮。</p>
昭二十七 515BC	<p>2 夏四月、光伏甲於堀室而享王。</p> <p>B 九月己未、子常殺費無極與鄆將師、盡滅其族、以說于國、謗言乃止。</p> <p>C 十二月、晉籍秦致諸侯之戍于周、…</p>
昭二十八 514BC	<p>A 夏六月、晉殺祁盈及楊食我。</p>
昭二十九 513BC	<p>A 三月己卯、京師殺召伯盈・尹氏固及原伯魯之子。…夏五月庚寅、王子趙車入于鄆以叛、陰不佞敗之。</p>

\*74 昭二十六傳7は王子朝出奔、敬王の成周入城を十一月辛酉・癸酉に繋げるが、經7は十月に繋げる。正義は「案傳、子朝奔楚及王入成周、皆在十一月、經書王入成周、子朝奔楚、皆在十月者、從告也」とするが、經の誤であろう。

昭三十 512BC	<p>1 三十年春王正月、公在乾侯、…</p> <p>2 夏六月、晉頃公卒。</p> <p>3 秋八月、葬。鄭游吉弔、且送葬。</p> <p>4 冬十二月、吳子執鍾吳子。遂伐徐、防山以水之。己卯、滅徐。</p>
昭三十一 511BC	<p>1 三十一年春王正月、公在乾侯、…</p> <p>4 夏四月、季孫從知伯如乾侯。</p> <p>7 十二月辛亥朔、日有食之。</p>
昭三十二 510BC	<p>1 三十二年春王正月、公在乾侯。</p> <p>5 秋八月、王使富辛與石張如晉、請城成周。…冬十一月、晉魏舒・韓不信如京師、合諸侯之大夫于狄泉、尋盟、且令城成周。…己丑、士彌牟營成周、…</p> <p>6 十二月、公疾、…己未、公薨。</p>
定元 509BC	<p>1 元年春王正月辛巳、晉魏舒合諸侯之大夫于狄泉、將以城成周。…庚寅、栽。…乃執仲幾以歸、三月、歸諸京師。</p> <p>2 六月癸亥、公之喪至自乾侯。戊辰、公即位。</p> <p>3 秋七月癸巳、葬昭公於墓道南。</p> <p>5 九月、立場宮。</p>
定二 508BC	<p>A 二年夏四月辛酉、鞏氏之群子弟賊簡公。</p> <p>3 冬十月、吳軍楚師于豫章。</p>
定三 507BC	<p>2 三年春二月辛卯、邾子在門臺、…</p> <p>A 秋九月、鮮虞人敗晉師于平中、…</p>
定四 506BC	<p>2 四年春三月、劉文公合諸侯于召陵、謀伐楚也。</p> <p>14 十一月庚午、二師陳于柏舉。</p> <p>15 己卯、楚子取其妹季芊・畀我以出、涉睢。鍼尹固與王同舟、王使執燧象以奔吳師。庚辰、吳入郢、…</p>

書法關連で月日が存置されたものとして、まず日食に關するものが6件ある。襄二十七 6「十一月乙亥朔、日有食之」・昭七 4「夏四月甲辰朔、日有食之」・昭十七 2「夏



六月甲戌朔、日有食之」・昭二十一4「秋七月壬午朔、日有食之」・昭二十四3「夏五月乙未朔、日有食之」・昭三十一7「十二月辛亥朔、日有食之」。この時期以外で、傳が日食に言及し、従って月ないし月日を存置する事例は、前期前半に1件（桓十七8）、後半に2件（莊二十五3・僖十五4）、中期前半に1件（文十五5）あるだけであり、かつこれら4件は全て解經形式である。對するに後期前半では最初の襄二十七6以外は、同時代人の言論をともなった説話形式となっている。

ついで大雩に關するものが5件ある。襄二十八4「秋八月、大雩、旱也」・昭三4「八月、大雩、旱也」・昭六6「秋九月、大雩、旱也」・昭十六5「九月、大雩、旱也」・昭二十四4「秋八月、大雩、旱也」。この時期以外で、傳が大雩に言及し、かつ月を存置する事例は、襄八7「秋九月、大雩、旱也」だけである。

これらの事例は、後期前半における全般的な記述の詳細化を端的に示すものともいえる。

襄二十八D「(十一月)癸巳、天王崩」は、經が周靈王崩を十二月甲寅に繋げることに對應したものである。

後期前半では、襄二十三6から定四2までの有經之傳が經の紀月をほぼ漏れなく存置する、あるいは少なくとも月への歸屬が示唆されている。傳がこの時代の記述を詳細化していることを明示する。前540～前510年代における月數・日數さらにそれに呼應する字數の圧倒的な多さを支えるものである。

【晉】欒盈の出奔につき、襄二十一4は經傳とも「秋」と記すだけである。その反攻についても、襄二十三經6は經3「夏」の後に置くだけだが、傳は「四月」を補っている。欒盈は結局敗滅し、范・中行・知・趙・韓・魏の「六卿」が確定する。晉史における重大事件であり、この年次を劃期として紀月・紀日が増加することは偶然ではない。

欒盈の反攻に乗じて齊が晉に侵攻し、魯の叔孫豹が晉への援軍を率いた(襄二十三8)。ついで齊が講和を求め、晉は齊と重丘の盟を結び(襄二十五5)、さらに秦と講和した(襄二十五G)。衛では甯喜が子叔を弑して獻公を復辟させ、孫林父が戚に據って晉に亡命した(襄二十六1)。後期前半に中原諸國に續發する内亂の先驅けである。晉は澶淵の會において孫林父の歸國を圖り(襄二十六5)、齊・鄭が晉・衛の調停を圖った(襄

二十六七)。

ついで宋の盟で晉楚講和が成立した(襄二十七2・5)。宋の盟の記述は月日が詳細である。中期後半が晉の楚・鄭および齊に対する軍事行動に特徴付けられていたのに對し、後期前半の晉が同盟國を軍事に動員することはほぼ皆無であり、杞の城壁の修築(襄二十九5・襄三十B)・宋の大災(襄三十3・5)への援助(襄三十8)など軍事以外の動員が目立つ。晉が杞を援助したのは、悼公夫人が杞女だったからであり、徵發された同盟國の輦蹙をかつている。傳が杞文公卒(昭六1)につき、特に月を存置しているのは、晉の援助を受けたのがほかならぬ文公だったからであろう。

一方で晉への朝聘の際の同盟國の卿の言動に關する記述が頻見するようになる。叔孫豹が歸國し、趙文子の死と韓宣子の無能を豫言する(襄三十一A)、鄭の子産が鄭簡公を補佐して晉に朝する(襄三十一D)などはそれに當たる。

晉・楚の南北對立は收束したが、地域的な紛争が目立つようになる。虢の盟の際、魯の季武子が莒を伐ったため、叔孫豹が抑留された(昭元2・B)。

同じ年、秦の公子鍼が晉に亡命し(昭元4)、趙文子が卒した(昭元I)。

ついで晉が齊の少姜を娶った。韓須が逆え、陳無宇が送ったが、陳無宇が卿でなかったため、晉がこれを抑留した(昭二A)。ほどなく少姜が卒し、晉は陳無宇を釋放した。鄭の印段が弔問し(昭二4)、游吉が少姜の葬に會した(昭三A)。鄭簡公が晉に朝した(昭三D)。晉はふたたび齊より夫人を娶り、鄭の罕虎がこれを賀した(昭三F)。

魯昭公が晉に朝した際、莒が魯の侵攻を訴えた(昭五5)。衛襄公の卒(昭七5)・葬(昭七8)に際し、晉は戚を返還した。齊女を逆えに行った荀盈がその歸途に卒すると、晉は荀躒を下軍佐とした(昭九B)。鄭の裨竈の豫言のとおり晉平公が卒し、同盟國の卿が會葬した(昭十A・4・5)。

後期前半における晉の軍事行動は、宋の華氏の亂や周の王子朝の亂に對する不徹底な出兵を除けば、もっぱら鮮虞を對象とするものであった。荀吳が肥を滅ぼした(昭十二C)のはその最初の事例である。

晉の同盟國が楚に朝聘することは、このころにはすでに見えなくなっており、晉は平丘の盟(昭十三4・5)で同盟の再編を圖り、これに参加しなかった魯昭公を抑留した(昭十六A)。王穆后が崩じ、荀躒が會葬した(昭十五C)。韓起が鄭に聘した(昭

十六 C)。晉昭公が卒し（昭十六 4）、魯の季平子が會葬した（昭十六 6）。荀吳が陸渾（昭十七 4）・鼓を滅ぼした（昭二十二 A）。邾の訴えで、魯の叔孫婁を抑留した（昭二十四 2）。

周景王崩（昭二十二 4）を契機とする王子朝の亂において、晉は悼王（王子猛）ついで敬王を支持して援軍を送り、あるいは士景伯を周に派遣するなどしたが（昭二十四 B）、介入が不十分で、王子朝が楚に亡命する（昭二十六 7）まで内亂は五年にも及んだ。ついで諸侯の師を招集して周に成している（昭二十七 C）。

祁氏・羊舌氏を誅滅した（昭二十八 A）。晉頃公が卒し、鄭の游吉が弔し會葬した（昭三十 2・3）。成周の城壁を修築した（昭三十二 5）が、これを拒んだ宋の仲幾を抑留した（定元 1）。鮮虞が平中で晉を破った（定三 A）。

召陵の會で楚を伐つことを圖ったが、晉は鮮虞を重視してこれを取りやめた（定四 2）。召陵の會とそれに續く皋鼫の盟は、晉が同盟國を招集した最後の會盟である。このちほどなく同盟國の離反が相次ぎ、「悼公復霸」で再建された晉の霸者體制は解體する。召陵の會以降、傳の紀月・紀日が減少に轉ずるのは偶然ではない。

【魯】後期前半において、中原諸國では内亂が續發する。そのため、内亂の主體であった世族に関する記述が詳細化される。魯について、晉・楚への朝聘以外の事件は以下の如くである。

孟莊子（仲孫速）の卒を契機に發生した紛争で、臧武仲（臧孫紇）が出奔する（襄二十三 10）。後期前半には、孟孝伯（仲孫羯）（襄三十一 4）・叔孫豹（昭四 5）・季武子（昭七 7）・叔弓（昭十五 2）・叔輒（昭二十一 5）・叔孫昭子（叔孫婁）（昭二十五 6）と、魯の卿の卒について、傳が月日を記すことが頻見する。

襄公が薨じ、昭公が立つ（襄三十一 2・3・5）。

莒の混亂に乗じ、郕を取る（昭四 4）。莒を蚡泉で破る（昭五 6）。季平子（季孫意如）が莒を伐ち、郕を取る（昭十 3）。魯と莒の紛争は後期前半に頻見する地域的紛争の一つである。これに呼應したためか、この時期については、展輿が莒犁比公を弑殺する（襄三十一 6）、莒著丘公が卒し、公子意恢が殺される（昭十四 5・6）など莒に關して紀月を存置する事例が見える。同様の事例はこれら以外には存在しない。

滕成公が卒し（昭三 1）、叔弓が會葬する（昭三 2）。滕子卒につき、傳が紀日まで持つのはこの事例だけである。實はこの事件は『禮記』檀弓に見える。

『禮記』檀弓	『左傳』昭三
<p>滕成公之喪、使子叔敬叔弔、進書、子服惠伯爲介。及郊、爲懿伯之忌不入。惠伯曰、政也、不可以叔父之私、不將公事。遂入。</p>	<p>五月、叔弓如滕、葬滕成公。子服椒爲介。及郊、遇懿伯之忌、敬子不入。惠伯曰、公事有公利、無私忌。椒請先入。乃先受館、敬子從之。</p>

惠伯の言を『左傳』は「有公利、無私忌」の對句に整理しており、加えて「公事」の語が『左傳』ではこの一例しか見出せぬことは、この語が他書の、まずは檀弓の引用に由来するものであることを示唆する。上述の襄四B「魯於是乎始鬻」と同様、滕成公卒は傳に先行する著名な逸話であったのであり、そのためとくに卒の月日が存置されたものと考え<sup>\*75</sup>。

中軍を廢した（昭五1）。昭公の母・齊歸の薨・葬（昭十一5・9）。

魯昭公が亡命した（昭二十五5・8・昭二十六A・2・昭三十一1・昭三十一1・4・昭三十二1）。昭公が薨じた（昭三十二6）。定公が立ち、昭公を葬った（定元2・3）。煬宮を立てた（定元5）。

【鄭】鄭は、晉の同盟下にあつて、陳を攻め（襄二十五4・9・襄二十六C）、楚・秦と交戦した（襄二十六D）。宋の盟ののちには晉・楚への朝聘が目立つ。それらについては晉・楚のところで指摘するとおりである。それ以外の事例は以下の如くである。中期後半に引き續き、世族間の抗争が頻見する。公孫黑肱の卒（襄二十二D）、游販の横死（襄二十二E）、伯有と子皙の對立を調停すべく盟が結ばれる（襄二十九F）が、對立は續き（襄三十C）、ついに内戦となつて伯有は敗死する（襄三十6）。子皙を負傷させた子南が追放される（昭元E）。子皙は、鄭伯・大夫の盟の際に僭上の振る舞いをなし（昭元F）、自殺を強いられる（昭二3）。刑書を鑄る（昭六2）。災があつた（昭六B）。昭七F

鄭人相驚以伯有、曰伯有至矣、則皆走、不知所往。鑄刑書之歲二月、或夢伯有介而行、曰、壬子、余將殺帶也。明年壬寅、余又將殺段也。及壬子、駟帶卒。國人

\*75 吉本1992。

益懼。齊・燕平之月、壬寅、公孫段卒、國人愈懼。其明月、子產立公孫洩及良止以撫之、乃止。

は、襄六八齊滅萊と同様の事例である。「鑄刑書之歲」は昭六、「齊燕平之月」は昭七1「七年春王正月、暨齊平」に当たる。

鄭簡公の薨・葬（昭十二2・5）。宋・衛・陳・鄭で火があり（昭十八2）、子産が社をまつた（昭十八B）

【楚】楚は呉の側に離反した舒鳩を滅ぼし（襄二十五8）、軍賦を定めた（襄二十五C）。鄭への出兵を求めた許靈公が楚で客死したため（襄二十六8）、楚は鄭に出兵した（襄二十六9）。宋の盟の結果、晋の同盟國が朝聘するようになった。楚康王が卒した際には、魯・鄭が會葬した（襄二十九1・B・2）。蘧罷が魯に來聘した（襄三十1）。衛の北宮文子が襄公を補佐して楚に朝した（襄三十一G）。

公子圍が郟敖を弑殺し自立した。靈王である（昭元10）。このころから楚についての立ち入った記述が豊富になる。鄭伯・許男が楚に朝した。靈王はこれを止めて江南に田した（昭三H・昭四A）。靈王は申に諸侯を集め、呉の朱方を攻略し、慶封を處刑した（昭四2・3）。靈王が呉を伐った（昭五8）。魯昭公が朝した（昭七2）。内紛で陳哀公が自殺した（昭八1・2）。楚が陳を滅ぼした（昭八9）。楚が許を夷に遷した（昭九2）。陳で災があった（昭九3）。靈王が蔡靈侯を殺害し、蔡を滅ぼした（昭十一3・10）。

楚の政變で靈王が自殺し、平王が立つ（昭十三2・3）。平王は陳・蔡を再建し、蔡は靈公を葬る（昭十三9）。ついで平王は篡立に功績のあった鬬成然らを殺す（昭十四C）。さらに平王は太子建のために秦より夫人嬴氏を娶るが、費無極の勧めで自らこれを娶り（昭十九B）、太子建は宋に出奔する（昭二十B）。蔡平公の葬の際、太子朱の失位が豫言されるが（昭二十一1）、果たして費無極の陰謀で朱は出奔を餘儀なくされる。平王が卒すると（昭二十六6）、費無極は誅殺される（昭二十七B）。

【呉】呉に関連して月日が保存される章は、呉王諸樊の戦死（襄二十五10）が、ようやく初見する。

楚靈王の對呉攻勢は楚のところで見たが、楚平王末年より呉が攻勢に轉ずる。すなわち、雞父の戦で楚を破り（昭二十三7）、楚太子建の母を呉に連れ歸る（昭二十三A）。

呉王僚を弑殺して立った闔廬は（昭二十七2）、徐を滅ぼし（昭三十四4）、豫章で楚を

破り（定二3）、ついには柏舉で楚を破り（定四14）、郢を攻略する（定四15）。

【周】中期後半以前について、月日をもつ周王朝関係の章は、實のところ經との月日の相違のために存置されたものばかりで、事件そのものの重視を意味しない。後期前半になって、周景王の王子佞夫誅殺（襄三十4）、單成公の卒（昭十一B）、原伯綏追放と甘悼公殺害（昭十二D）、太子壽の卒（昭十五A）、王穆後の崩（昭十五B）、毛得の毛伯過弑殺（昭十八A）など世族の内紛を伝える章が頻見するようになる。

景王の崩を契機に王子朝の亂が起こる（昭二十二4・6・7・8・9・昭二十三4・8・9・昭二十四A・C・5・昭二十五A・昭二十六B・C・7）。王子朝の亂に關する記述は件數・分量ともに多く、かつ月日を多く擁している。前510年代の日數の多さはこれに由來する。ついで王子朝餘黨の誅殺、王子趙車の舉兵（昭二十九A）、鞏簡公の殺害（定二A）が見える。昭二十九Aでは原伯魯の子が誅殺されているが、遑って曹平公の葬（昭十八4）において原氏の滅亡が豫言されており、曹平公卒（昭十八1）が月を保存するのはそのためであろう。

【齊】齊についても、内紛が目立つ。崔杼の莊公弑殺、景公擁立（襄二十五2）、崔氏の滅亡、慶封の政權掌握（襄二十七D）、慶封が惠族欒・高氏および陳・鮑氏に敗れ、吳に亡命（襄二十八6）、莊公改葬（襄二十八E）、欒・高氏の高止追放（襄二十九10・E）、子尾（惠族高氏）の閭丘嬰殺害（襄三十一B）、子雅（惠族欒氏）が盧蒲嬖を北燕に追放（昭三G）、子尾が卒し、子旗（惠族欒氏）がその室を治める（昭八B）、惠族欒・高氏が陳・鮑氏に敗れ亡命（昭十2）といった次第である。

地域的な紛争としては、齊景公が晉の承認を得た上で、北燕を伐って簡公を復辟させ（昭六9・昭七1）、徐を伐ち、ついで蒲隧の盟で講和し（昭十六B）、莒へ出兵したこと（昭十九4・昭二十二1）が見える。

そのほか、齊景公が沛に田した際の逸話（昭二十E）が見える。

【宋】襄公以後の歴代宋公の卒につき、傳は月を記す。後期前半については、宋平公卒・魯の叔弓の會葬（昭十6・昭十一1）、宋元公卒（昭二十五7）が見える。

地域的な紛争としては、邾人を俘虜とした邾を宋元公が伐って邾人を奪還し、蟲で盟したことが見える（昭十八3・昭十九1・C）。この時の邾子が邾莊公であり、傳は邾莊公卒（定三2）につき、月日を存置している。

内紛としては、魯の梓慎の豫言した（昭二十A）ように、華氏の亂が勃發している（昭二十C・4・昭二十一3・B）。

【衛】内紛としては、まず中期後半に引き續き、甯喜の子叔（殤公）弑殺、獻公復位、孫林父出奔（襄二十六1・3）があり、降って齊豹の亂（昭二十3）が見える。

【許】許悼公弑殺（昭十九2）は月日を存置する。後期前半では傳は弑君の事例のすべてについて、經の月もしくは月日を存置し、あるいは獨自資料から月日を補っている。

## 第六節 後期後半

召陵の會の翌年である定公五年 505BC から傳の年代記的記述の終わる哀公二十七年 468BC までの 38 年間。

定五 505BC	<p>4 六月、季平子行東野。還、未至、丙申、卒于房。</p> <p>B 秋七月、子期・子蒲滅唐。九月、夫概王歸、自立也、…</p> <p>C 乙亥、陽虎囚季桓子及公父文伯、而逐仲梁懷。冬十月丁亥、殺公何藐。己丑、盟桓子于稷門之內。庚寅、大誣。逐公父馭及秦盪、皆奔齊。</p>
定六 504BC	<p>2 二月、公侵鄭、取匡、爲晉討鄭之伐胥靡也。</p> <p>A 四月己丑、吳大子終曩敗楚舟師、…</p> <p>B 六月、晉闔沒戍周、且城胥靡。</p> <p>5 秋八月、宋樂祁言於景公曰、…</p> <p>D 冬十二月、天王處于姑蕪、…</p>
定七 503BC	<p>A 七年春二月、周儋翩入于儀栗以叛。</p> <p>C 夏四月、單武公・劉桓公敗尹氏于窮谷。</p> <p>D 冬十一月戊午、單子・劉子逆王于慶氏。晉籍秦送王。己巳<sup>*76</sup>、王入于王城、館于公族黨氏、而後朝于莊宮。</p>

\*76 長曆「十二月五日。有日無月」。

定八 502BC	<p>1 八年春王正月、公侵齊、…</p> <p>A 二月己丑、單子伐穀城、劉子伐儀栗。辛卯、單子伐簡城、劉子伐孟、以定王室。</p> <p>13 九月、師侵衛、晉故也。</p> <p>15 冬十月、順祀先公而祈焉。辛卯、禘于僖公。</p> <p>16 壬辰、將享季氏于蒲圃而殺之、戒都車曰、癸巳至。</p>
定九 501BC	<p>3 六月、伐陽關、陽虎使焚萊門。</p>
定十二 498BC	<p>10 冬十二月、公圍成、弗克。</p>
定十三 497BC	<p>5 夏六月、上軍司馬籍秦圍邯鄲。…秋七月、范氏·中行氏伐趙氏之宮、趙鞅奔晉陽、晉人圍之。</p> <p>6 冬十一月、荀躒·韓不信·魏曼多奉公以伐范氏·中行氏、弗克。…丁未、荀寅·士吉射奔朝歌。</p> <p>7 十二月辛未、趙鞅入于絳、…</p>
定十四 496BC	<p>2 二月、楚滅頓。</p> <p>B 冬十二月、晉人敗范·中行氏之師於潞、…</p>
定十五 495BC	<p>3 二月、楚滅胡。</p> <p>5 夏五月壬申、公薨。</p> <p>9 秋七月壬申、嬀氏卒。</p>
哀元 494BC	<p>A 三月、越及吳平。</p> <p>B 夏四月、齊侯·衛侯救邯鄲、圍五鹿。</p> <p>C 秋八月、吳侵陳、脩舊怨也。</p> <p>E 冬十一月、晉趙鞅伐朝歌。</p>
哀二 493BC	<p>4 六月乙酉、晉趙鞅納衛大子于戚。</p> <p>5 秋八月、齊人輸范氏粟、鄭子姚·子般送之。士吉射逆之、趙鞅禦之、遇于戚。…甲戌、將戰、…</p>
哀三 492BC	<p>3 夏五月辛卯、司鐸火。火踰公宮、桓·僖災。</p> <p>A 六月癸卯、周人殺萇弘。</p>



	B 冬十月、晉趙鞅圍朝歌、師于其南。荀寅伐其郛、使其徒自北門入、已犯師而出。癸丑、奔邯鄲。十一月、趙鞅殺士皋夷、惡范氏也。
哀四 491BC	A 秋七月、齊陳乞・弦施・衛甯跪救范氏。庚午、圍五鹿。九月、趙鞅圍邯鄲。冬十一月、邯鄲降。荀寅奔鮮虞、趙稷奔臨。十二月、弦施逆之、遂墮臨。國夏伐晉、取邢・任・欒・鄆・逆時・陰人・孟・壺口。會鮮虞、納荀寅于柏人。
哀五 490BC	4 秋、齊景公卒。冬十月、公子嘉・公子駒・公子黔奔衛、公子鉏・公子陽生來奔。
哀六 489BC	4 夏六月戊辰、陳乞・鮑牧及諸大夫、以甲入于公宮。 6 秋七月、楚子在城父、…庚寅、昭王攻大冥、卒于城父。 A 八月、齊邴意茲來奔。 7 陳僖子使召公子陽生。…冬十月丁卯*77、立之。
哀八 487BC	2 三月、吳伐我。 3 夏五月、齊鮑牧帥師伐我、取讎及闚。 A 或譖胡姬於齊侯、曰、安孺子之黨也。六月、齊侯殺胡姬。 B 秋、及齊平。九月、臧賈如如齊涖盟。齊閭丘明來涖盟、且逆季姬以歸、嬖。 7 冬十二月、齊人歸讎及闚、季姬嬖故也。
哀九 486BC	2 二月甲戌、宋取鄭師于雍丘、…
哀十一 484BC	3 爲郊戰、故公會吳子伐齊。五月、克博、壬申、至于贏。…甲戌、戰于艾陵、…
哀十二 483BC	1 十二年春王正月、用田賦。 2 夏五月、昭夫人孟子卒。 6 冬十二月、螽。

\*77 哀六經7「齊陽生入于齊、齊陳乞弑其君荼」の陽生入齊を杜預は經6「秋七月庚寅」の下にあることから、七月に繋げる。「齊陳乞弑其君荼」は傳では「冬十月丁卯」以後の事件だが、杜預傳注は「實以冬殺、經書秋者、史書秋記始事、遂連其死通以冬告魯」と解する。従うべきであろう。

	5 九月*78、宋向巢伐鄭、取錫、殺元公之孫、遂圍囿。十二月、鄭罕達救囿、丙申、圍宋師。
哀十三 482BC	5 六月丙子、越子伐吳、…乙酉、戰、…丙戌、復戰、…丁亥、入吳。 A 秋七月辛丑、盟、吳晉爭先。
哀十四 481BC	3 夏五月壬申、成子兄弟、四乘如公。…庚辰*79、陳恆執公于舒州。 9 六月、使左師巢伐之、… 10 甲午、齊陳恆弑其君壬于舒州。 12 秋八月辛丑、孟懿子卒。
哀十五 480BC	C 閏月*80、良夫與大子入、…
哀十六 479BC	3 夏四月己丑*81、孔丘卒。 B 六月、衛侯飲孔悝酒於平陽、… C 秋七月、殺子西・子期于朝、…
哀十七 478BC	B 三月、越子伐吳。 C 夏六月、趙鞅圍衛。 D 秋七月己卯、楚公孫朝帥師滅陳。 F 冬十月、晉復伐衛、…十一月、衛侯自鄆入、…辛巳、石圃因匠氏攻公、…十二月、齊人伐衛、衛人請平。
哀十八 477BC	B 三月、楚公孫寧・吳由于・蘧固敗巴師于鄆、…
哀二十 475BC	C 十一月、越圍吳、…
哀二十一 474BC	A 夏五月、越人始來。 B 秋八月、公及齊侯・邾子盟于顧。

\*78 哀十二傳5が傳6の後に置かれるのは、傳5が翌年に續くからである。6「十二月」の後に5「九月」があり、編年體の形式を損なっている。

\*79 哀十四經3「夏四月、齊陳恆執其君、寘于舒州」を傳3は五月壬申・庚辰に繋げる。經の誤であろう。

\*80 哀十六經1「十有六年春王正月己卯、衛世子蒯聵自戚入于衛。衛侯輒來奔」を哀十五傳Cは「閏月」に繋げる。杜預經注は「從告」とするが、哀十五年十二月の後に傳の曆が置閏し（哀十六は建丑正月）、魯曆が置閏しなかった（哀十六は建子正月）ものであろう。

\*81 哀十六經・傳3「四月己丑」に對し、杜預經注は「四月、十八日乙丑、無己丑、己丑、五月十二日、日月必有誤」とする。己丑は乙丑の誤寫となろう。

哀二十二 473BC	A 夏四月、邾隱公自齊奔越、… B 冬十一月丁卯、越滅吳、…
哀二十三 472BC	B 夏六月、晉荀瑤伐齊、…壬辰、戰于犁丘。齊師敗績、知伯親禽顏庚。 C 秋八月、叔青如越、…
哀二十四 471BC	A 夏四月、晉侯將伐齊、… D 閏月、公如越、
哀二十五 470BC	A 夏五月庚辰、衛侯出奔宋。 B 六月、公至自越。
哀二十六 469BC	A 夏五月、叔孫舒帥師會越皋如・后庸・宋樂茂納衛侯、… B 冬十月、公游于空澤。辛巳、卒于連中。
哀二十七 468BC	A 二十七年春、越子使后庸來聘、且言邾田、封于駘上。二月、盟于平陽。 B 夏四月己亥、季康子卒。 D 秋八月甲戌、公如公孫有陘氏、因孫於邾、乃遂如越。

哀十二 6「冬十二月、螽。季孫問諸仲尼、仲尼曰、丘聞之、火伏而後蟄者畢。今火猶西流、司麻過也」は説話形式だが、曆の不具合を批判するという説話の必要上、紀月が存置されたものである。

【晉】召陵の會を契機に、同盟國の離反が相次ぐ。前 500～前 490 年代における日數・字數の減少は、晉への朝聘に關する記述が著しく減少したことの反映である。中期後半から後期前半にかけて頻見した鄭の晉との交渉が見えなくなくなる。鄭については内政關連のものさえ見えない。

後期前半においても地域的な紛争はあったが、それは覇者に次ぐ有力諸侯と周邊小國との紛争であったに過ぎない。對するに、後期後半においては、齊・魯・宋・鄭・衛といった有力諸侯間の交戦が頻見するようになる。以下はその事例である。

鄭が王子朝の餘黨・儋嗣を支援して晉に離反し、晉は魯に命じ鄭を伐たせ（定六 2）、周に援軍を送った（定六 B）。來聘した宋の樂祁を抑留した（定六 5）。魯は晉に離反し

た齊・衛を伐った（定八1・13）

晉においても世族間の紛争である范・中行の亂が勃發し、齊・衛が范・中行の側に荷擔したこともあり、七年の久しきに及んだ（定十三5・6・7・定十四B・哀元B・E・哀二4・5・哀三A・B・哀四A）。

齊を破った吳と黄池の盟を強いられたが、越の對吳開戦で吳は撤退した（哀十三5・A）。晉は霸權の再建を圖り、まずは衛を攻め（哀十七C・F）、さらに衛の背後にあった齊を攻めている（哀二十三B・哀二十四A）。

【魯】家臣の擡頭が目立つ。季平子卒ののち擡頭した陽虎は（定五4・C）、三桓打倒を謀って失敗し、亡命する（定八15・16・定九3）。季桓子（季孫斯）の家宰・仲由（子路）は三都の破壊を謀ったが、孟氏の成宰・公斂處父が叛する（定十二10）。

晉のところで述べたように、魯は晉の同盟國として、鄭・齊・衛に出兵したが、定十には齊と講和し、晉の同盟から離脱した。定公・夫人定姒が相次いで薨ずる（定十五5・9）。

桓宮・僖宮に災があった（哀三3）。魯が邾を攻略したため、吳の侵攻を被った（哀八2）。ついで季康子（季孫肥）が妹・季姬を齊悼公に與えなかったため、齊の侵攻を被った（哀八3・A・B・7）。魯は吳に接近し、艾陵の戦で齊を破り（哀十一3）、黄池の盟に参加した（哀十三A）。この間、田賦を採用し（哀十二1）、昭公夫人孟子が薨じている（哀十二2）。孟懿子（仲孫何忌）卒ののち、成宰・公孫宿が叛し（哀十四12）、齊に降ったが、魯は齊と講和した。孔子が卒した（哀十六3）。

越が始めて來聘した（哀二十一A）。魯はなお齊の盟に参加したが（哀二十一B）、晉の齊への侵攻に際しては晉の側に參戦し（哀二十四A）、ついで越にもっばら接近する（哀二十三C・哀二十四D・哀二十五B・哀二十六A・哀二十七A）。季康子が卒したのち（哀二十七B）、哀公は越による三桓排除を謀るが、追放される（哀二十七D）。

【楚】吳の郢攻略に對し、秦の援軍が到着し、唐を滅ぼす。吳の夫概王が本國で自立したため、吳は撤兵する（定五B）。吳太子終纍が楚の舟師を破る（定六A）。楚は勢力圏の再編を圖り、頓（定十四2）・胡（定十五3）を滅ぼす。

陳を救援すべく吳と對陣していた昭王が卒する（哀六6）。白公勝の亂（哀十六C）に乗じて侵攻した陳を滅ぼし（哀十七D）、巴を撃退する（哀十八B）。

【吳】越王句踐を降した吳王夫差は（哀元 A）、陳を攻め（哀元 C）、ついで北上して魯を攻め（哀八 2）、艾陵の戦で齊を破り（哀十一 3）、晉と黄池に會して、中原の霸權を狙った（哀十三 A）、ところが越が吳に侵攻したため（哀十三 5）、吳の擴張は挫折を餘儀なくされる。越の侵攻は續き（哀十七 B）、吳は包圍され（哀二十 C）、滅亡に至る（哀二十二 B）。

【越】越は魯に聘し（哀二十一 A）、邾隱公の亡命を受け入れ（哀二十二 A）、魯昭公の朝を受け（哀二十四 D・哀二十五 B）、衛出公の復位を謀って衛に侵攻するなど（哀二十六 A）、吳に代わって中原進出を志向するようになる。

【齊】景公が卒すると、陳・鮑氏が悼公を擁立する（哀五 4・哀六 4・A・7・哀八 A）。齊悼公は季康子（季孫肥）の妹・季姫をめぐって魯と紛争する（哀八 3・B・7）。悼公卒後、艾陵の戦で吳に大敗する（哀十一 3）。陳氏が簡公を弑殺する（哀十四 3・10）。

【周】王子朝の餘黨・儋翩の亂（定六 B・D・定七 A・C・D・定八 A）。

【衛】孔悝は莊公を擁立し、出公を出奔させるが（哀十五 C）、莊公に追放される（哀十六 B）。晉が衛を包圍するが、齊が衛に援軍を出したため撤兵する（哀十七 C）。晉が衛を攻略する。莊公が出奔し、晉は公孫般師を擁立する。晉が撤兵したのち莊公が歸國するが、殺害され、公孫般師が復位するが、齊の侵攻に壓迫され、公子起が擁立される（哀十七 F）。公子起が追放されたのち、出公が復位するが、ふたたび追放される（哀二十五 A）。出公は越の援軍を得て復位を圖るがこれに失敗する（哀二十六 A）。

【宋】鄭との紛争（哀九 2・哀十二 5）、向魑の亂（哀十四 9）、宋景公卒にともなう内紛（哀二十六 B）が見える。

### 第三章 『左傳』の春秋史認識

前章の分析をふまえて、『左傳』における春秋史の時代区分とそれぞれの時期の特徴を整理すると次のようになろう。

#### 1 前期：晉霸以前

(1) 前半（隱公元年 722BC～莊公八年 686BC）：鄭に關連する章が、とりわけ鄭莊

公が王朝の卿士をつとめた桓五 707BC 以前については圧倒的に多く、前 710 年代の日数・字数が突出している。

(2) 後半（莊公九年 685BC～僖公二十二年 638BC）：傳は齊桓公の霸を明言しているが、齊に關わる章は必ずしも多くない。傳の記述は全般に簡單であり、前 700～前 640 年代の日数・字数は傳において最低水準にある。

## 2 中期：晉霸の形成

(3) 前半（僖公二十三年 637BC～成公元年 590BC）：晉文公の登場にともない、前 630 年代の字数・日数が突出する。その後も晉に關連する章は優位を維持し、晉の政治史的推移をたどるに足るが、晉霸の頽勢を反映してその絶対数はさほど多くなく、日数・字数は前 620～前 600 年代に減少しつづける。

(4) 後半（成公二年 589BC～襄公二十年 553BC）：晉霸の再編期に當たる。字数は前 590～前 550 年代においておおむね増加を續け、日数・月数は前 570～前 560 年代に經を上まわる。何より晉の軍事行動について記述が詳細化されたためだが、今一つは魯の季武子が武宮を立てる、叔孫僑如追放、鄭の公子班の公子緇擁立、子駟暗殺、公孫董卒、子孔殺害、齊の國佐誅殺、靈公卒後の紛争、宋の魚石の亂、華臣出奔、衛の獻公出奔など、晉以外の諸國についても世族の動向や内紛について詳細な記述が見られるようになるためでもある。

## 3 後期：晉霸の解體

(5) 前半（襄公二十一年 552BC～定公四年 506BC）：襄二十七の晉楚講和の成立によって晉霸が完成する。それに先立ち、襄二十三には欒氏の滅亡によって晉の六卿が確定し、晉史の劃期をなしている。前 540 年代が字数・日数・月数ともに傳において最高水準にあり、前 510 年代まで漸減していくものの、なお大きな数を維持しつづけている。晉霸完成の結果、晉への朝聘が頻繁化するが、他方、晉楚講和にとまなう軍事的規制の弛緩は、王朝・有力諸侯國における國君・世族の内紛や、有力諸侯國と周邊小國の地域的紛争を惹起し、對晉戦争から解放された楚靈王の侵攻を契機に、吳楚戦争の激化をもたらした。晉楚對立を軸とするある意味單純な中期に比べ、後期の情況のこのような複雑化が、傳の記述の詳細化、字数・月数・日数の増加を支えている。

(6) 後半（定公五年 505BC～哀公二十七年 468BC）：定四の召陵の會は晉の最後の

會盟であり、劃期たるにふさわしい。前 500～前 480 年代の字數・日數はそれ以前に比べて急減している。後半においては、晉の范・中行の亂をはじめとして王朝・有力諸侯國の内紛はなお續き、吳の北上、吳越戰爭、越の北上といった新たな情況も加わるが、何より晉霸解體にともない、前半に特徴的だった晉への朝聘を詳細化した章が消滅したことが、字數・日數の減少をもたらしている。

冒頭に言及した衛聚賢の時代区分①～④は、ここの前期・中期・後期前半・後期後半に当たり、本稿の時代区分は結果的に衛氏のそれを追認するものとなっている。ここで問題とすべきは、①～④の字數を①「低」・②「平」・③「高」・④「平」と整理し、それに従って字數の増減をもっぱら資料の有無に歸する、すなわち、①→②→③については、時代が降るほど資料が豊富になることを反映して字數が増加するが、③→④については、最も降った時代については資料がなお傳播していないため、字數が減少する、という論點である。

この論點は二重に問題がある。すでに再々指摘したように、前 710 年代・前 630 年代はその前後に比べて字數が多い。すなわち①～③の字數は單純に増加しているわけではないのである。さらに、傳の字數を資料の多寡に歸することは、傳が、獲得した資料を取捨選擇することなく年時月日ごとに排列したという理解を導きかねない。

この點に對する反證となるのが、鄭に關連する記述である。まず、前 710 年代の日數・字數の突出が、王朝の卿士としての鄭莊公に關連する記述の詳細化に由來することはすでに上述の如くである。さらに次のような材料がある。

鄭子家使執訊而與之書、以告趙宣子、曰、寡君即位三年 [文二 625BC]、召蔡侯而與之事君。九月、蔡侯入于敝邑以行。敝邑以侯宣多之難、寡君是以不得與蔡侯偕。十一月、克滅侯宣多、而隨蔡侯以朝于執事。十二年 [文十一 616BC] 六月、歸生佐寡君之嫡夷、以請陳侯于楚、而朝諸君。十四年 [文十三 614BC] 七月、寡君又朝以戴陳事。十五年 [文十四 613BC] 五月、陳侯自敝邑往朝于君。往年 [文十六 611BC] 正月、燭之武往、朝夷也。八月、寡君又往朝。以陳・蔡之密邇於楚、而不敢貳焉、則敝邑之故也。雖敝邑之事君、何以不免。在位之中、一朝于襄、而再

見于君。夷與孤之二三臣相及於絳。雖我小國、則箴以過之矣。今大國曰、爾未逞吾志。敝邑有亡、無以加焉。古人有言曰、畏首畏尾、身其餘幾。又曰、鹿死不擇音。小國之事大國也、德、則其人也、不德、則其鹿也、鋌而走險、急何能擇。命之罔極、亦知亡矣、將悉敝賦以待於籋。唯執事命之。文公二年〔莊二十三 671BC〕六月壬申、朝于齊。四年〔莊二十五 669BC〕二月壬戌、爲齊侵蔡、亦獲成於楚。居大國之間、而從於強令、豈其罪也。大國若弗圖、無所逃命。(文十七 4)

鄭人使少正公孫僑對、曰、在晉先君悼公九年、我寡君於是即位〔魯襄八年 565BC〕。即位八月而我先大夫子駟、從寡君以朝于執事。執事不禮於寡君。寡君懼、因是行也。我二年〔襄九 564BC〕六月、朝于楚、晉是以有戲之役。楚人猶競、而申禮於敝邑。敝邑欲從執事、而懼爲大尤、曰、晉其謂我不共有禮、是以不敢攜貳於楚。我四年〔襄十一 562BC〕三月、先大夫子驥又從寡君以觀釁於楚、晉於是乎有蕭魚之役。謂我敝邑、邇在晉國、譬諸草木、吾臭味也、而何敢差池。楚亦不競、寡君盡其土實、重之以宗器、以受齊盟。遂帥群臣隨于執事、以會歲終。貳於楚者、子侯・石孟、歸而討之。溴梁之明年〔襄十七 556BC〕、子驥老矣、公孫夏從寡君以朝于君、見於嘗酎、與執驥焉。閏二年〔襄二十 553BC〕、閏君將靖東夏、四月、又朝以聽事期。不朝之間、無歲不聘、無役不從。以大國政令之無常、國家罷病、不虞荐至、無日不惕、豈敢忘職。大國若安定之、其朝夕在庭、何辱命焉。若不恤其患、而以爲口實、其無乃不堪任命、而翦爲仇讎、敝邑是懼、其敢忘君命。委諸執事、執事實重圖之。(襄二十二 B)

文十七 4 は鄭文公・穆公、襄二十二 B は鄭簡公の朝聘を記す。これらが原資料そのままなのか、あるいは原資料に基づく傳の創作か、俄には判断できないが、ここで問題とすべきは、これら年月さらには年月日を明示する朝聘が、傳の当該年次に見えないということである。このことは、獲得した資料を傳が取捨選擇したことの明證である。そもそも、無傳之經が存在することや、有經之傳が經の月日を保存しないことも、傳における取捨選擇を明示するものである。

字數や月數・日數は原資料の多寡以上に、傳の取捨選擇を反映するものとする。



月日の保存は、記述の詳細化の一環であり、傳の当該事件への關心を反映する。月日を保存した章から看取される春秋史は、實際の春秋史である以上に、傳の春秋時代に對する關心、傳における春秋史認識を示すものといえる。本章の整理に従うならば、傳の關心は、晉霸の推移にあり、とりわけその關心の中核は、晉霸が完成から解體に轉じた後期前半にあったといえる。

## 結語

本稿では、傳における月日の保存、すなわち記述の詳細化が、傳における關心の強さを反映するものと見立てた上で、傳の春秋史認識のありかたを検討した。

しかしながら、傳における月日の保存に限らず、傳の編纂において嚴密に適用されるような取舍選擇の基準を想定することは困難である。本稿で推定した傳の春秋史認識についても、あらかじめ明確に意識されていたわけではなく、個々の事件が記述される過程で、傳の編纂者のなかば潜在的な關心が作用し、いわば場当たりの月日の保存がなされたものと考え<sup>\*82</sup>。従って、月日の保存だけが關心の強弱を示すわけではない。ここでは晉霸への關心について、やや異なった視點から傍證を擧げておこう。

本稿で示してきたように、傳において月日の保存された章は、晉に關わるものが壓倒的に多いが、「晉に關わる」という定義は、實のところ多分に嚴密を缺く。本稿では記述の便宜上、晉が主催する會盟や、晉に對する朝聘など、晉が一方の當事者である章をも「晉に關わる」ものとして論じたが、當然のことながら、それらの章には他方の當事者が見える。このような章を晉あるいはその他の一國に歸屬させることはそもそも無理がある。結局のところ、傳の記述において特定の一國に屬することが形式上確言できる部分は、まずはその章の記述内容が特定の一國の内部に限定されているも

---

\*82 月日の保存の無原則性については、經文にすでに認められる。春秋序疏「其時而不月、月而不日者、史官立文、亦互自有詳略、何則。案經朝聘・侵伐・執殺大夫・土功之屬、或時或月未有書日者。其要盟・戰敗・崩薨・卒葬之屬、雖不盡書日、而書日者多、是其本有詳略也。計記事之初日月應備、但國史總集其事、書之於策、簡其精粗、合其同異、量事而制法、率意以約文、史非一人、辭無定式、故日月參差、不可齊等」。疏は「史非一人」に歸するが、單獨の著作であっても記述の一貫性が必ずしも維持されないことは、たとえば『史記』を見れば容易に了解される。

のであり、ついで複数國が關わる場合は、發言者の國別を確認しうる言論の部分のみということになろう。このような見通しで、國別の言論の字數を統計すると、隱公元年～哀公二十七年について、言論の總字數 85,593 字のうち、晉 25,040 字 (29.3%)、魯 13,071 字 (15.3%)、鄭 10,654 字 (12.4%)、楚 9,910 字 (11.6%)、齊 6,070 字 (7.1%)、衛 4,366 字 (5.1%)、周 3,612 字 (4.2%)、宋 3,089 字 (3.6%)、吳 2,081 字 (2.4%) となり、以上の上位九箇國で 77,893 字 (91.0%) となる。本稿で、月日を有する章を國別に整理した際に登場した國は、ほぼこの九箇國に限られている。

ついで、晉・魯・鄭・楚・齊の上位五箇國につき、前 719～前 480 年の 10 年ごとの言論の累積字數をグラフにすると圖 4 の如くである。

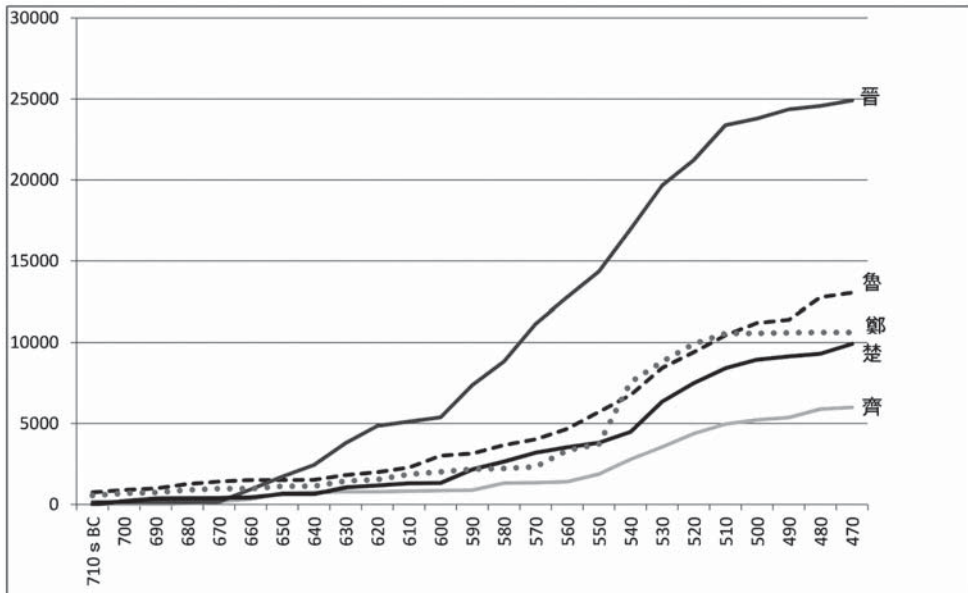


圖 4 國別言論累積字數

晉はつとに前 650 年代以降首位を維持し続けている。魯はさほどの變化もなく一定の割合で増加し続けて第 2 位を維持する。『左傳』が『春秋』の傳である以上、當然ともいえるが、魯は一定の登場頻度を一貫して維持しているわけである。第 3 位の鄭は特異であり、前 550～前 520 年代に急増し、その後は横ばいになる。容易に豫測されるように、子産の初見が襄公二十二年 551BC、その卒が昭公二十年 522BC であり、この急増は、ほとんど子産の長廣舌に由来するものである。第 4 位の楚は前 600 年代と

前 540 年代に増加が加速する。莊王 (613-591BC)・靈王 (540-529BC) の時代に當たる。第 5 位の齊は、前 580 年代から増加が緩やかに加速する。まずは鞏の戦、ついで國佐誅殺以降、世族の紛争が斷續的に續くことを反映するものである。

ここに確認した國別言論累積字數のありかたは、本稿の主たる分析対象である月日を有する章の國別の時代的變化に對應する。晉人を選好することは、やはり晉霸への關心を示すものにほかならず、本稿の推論を傍證するものとなる。

それでは、傳が春秋後期前半の晉霸の完成から解體に特段の關心をもったのは何故か。一體、霸者が周王朝を奉じて同盟國を結集するという晉霸のありかたは、降って 325BC に秦惠文王が王朝推戴を斷念して王號を稱するまで、歴史的な經驗を具體的にたどりうる唯一の全中國的政治社會秩序であった。ようやく完成された晉霸がなぜ半世紀で解體したのか、これは戰國中期に至るまですぐれて現實的な問いでありえたはずである。そのことが春秋後期後半への關心を支えていたものと考えられる。この問題の具體的な考察は續稿に委ねたい。

#### 引用文献

- 部積意 2009 「杜預《長曆》與經傳曆日考證」、『清華學報』39-3、389～428 頁。
- 河南省文物考古研究所 1983 「河南溫縣東周盟誓遺址一號坎發掘簡報」、『文物』1983-3、78～89・77 頁。
- 洪業 1937 「春秋經傳引得序」、『洪業論學集』223～289 頁、中華書局、1981。
- 野間文史 2010 『春秋左氏傳—その構成と基軸』、研文出版。
- 小倉芳彦 1970 『中國古代政治思想研究—『左傳』研究ノート—』、青木書店。
- 1988-89 『春秋左氏傳』、岩波書店。
- 1991 「左傳と史記」、『古代中國を讀む—小倉芳彦著作選 I』322～336 頁、論叢社、2003。
- 山西省文物工作委員會 1976 『侯馬盟書』、文物出版社、1976。
- 童書業 1980 『春秋左傳研究』、上海人民出版社。
- 衛聚賢 1928 「左傳的研究」、『古史研究』77～160 頁、新月書店。
- 山田崇仁 2004 「歴史記録としての『春秋』— N-gram 統計解析法による分析—」、『中國古代史論叢』13～42 頁、立命館東洋史學會
- 楊伯峻 1990 『春秋左傳注 (增訂本)』、中華書局。
- 吉本道雅 1985a 「春秋載書考」、『東洋史研究』43-4、1～33 頁。
- 1985b 「晉國出土載書考」、『古史春秋』2、110～132 頁。
- 1992 「檀弓考」、『古代文化』44-5、38～46 頁。
- 1995 「曲禮考」小南一郎編 『中國古代禮制研究』117～164 頁、京都大學人文科學研究所。
- 2005 『中國先秦史の研究』、京都大學學術出版會。

——2014「國語成書考」、『京都大學文學部研究紀要』53、1～41頁。

張汝舟 1987『二母室古代天文曆法論叢』、浙江古籍出版社。

趙生群 2000『《春秋》經傳研究』、上海古籍出版社。

中國社會科學院 1984-94『殷周金文集成』、中華書局。